元刊雑劇の研究（二）「漢高皇濯足氣英布」全訳校注

赤松[1]　紀彦・金[2]　文京・小松[3]　謙・佐藤[4]　晴彦・高橋[5]　繁樹
高橋[6]　文治・竹内[7]　誠・土屋[8]　育子・松浦[9]　恆雄

本稿は京都大学人文科学研究所における「元代の社会と文化」研究班で行われた元刊本雑劇研究会の成果に基づくものである。各担当者の原稿をもとに、討論の内容により修正を加えた。全体のまとめは小松、末尾の校勘表作成は土屋が担当した。

凡例

①異体字・俗字・誤字も含め、本文の用字については、ひとまず元刊本にできるだけ忠実な字を用い、その上で校勘を加えることとした。ただし、略字は正字体に改めてある。

②押韻箇所は「。」、韻を踏まない句切れの箇所は「、」で示した。「△」は句中蔵韻（一句の中で更に韻を踏む字があるもの）を示す。

③明らかに字の誤りと思われるものについては、（　）内に正しい字と思われるものを付け加えた。ただし、白話文学の世界で史書とは異なった文字が通常用いられている場合（例えば徐世勣の字の懋功は、白話文学では茂功または茂公と表記される）には、改めることはせず、注で指摘するにとどめた。原テキストには存在しないが明らかに脱字があると考えられる場合には、《　》に入れて補うかたちを取った。また明らかに衍字と思われるものには〈　〉を付した。

校勘に使用したテキストは、鄭騫『校訂元刊雑劇三十種』（世界書局一九六二。鄭本と略称）・徐沁君『新校元刊雑劇三十種』（中華書局一九八〇。徐本と略称）・寧希元『元刊雑劇三十種新校』（蘭州大学出版社一九八八。寧本と略称）である。また異本として元曲選本があり、また第一折については『納書楹曲譜』、第四折については『盛世新聲』『詞林摘艶』『雍熙樂府』に曲文が収録されているが、異同が非常に多岐にわたり、すべて記すのは煩雑に過ぎるので、校勘記では主要なもののみ指摘し、詳細は末尾に付した

校勘表にゆだねることとする。

なお字体は、原文・引用・人名は繁体字、その他は新字を使用した。

新刊關目漢高皇濯足氣英布

〔校〕なし。

〔注〕○「關目」は「氣英布」以外にも、元刊本三十種のうち「拜月亭」「調風月」「遇上皇」「看錢奴」「汗衫記」「魔合羅」「介子推」「東窗事犯」「霍光鬼諫」「七里灘」「周公攝政」「追韓信」「竹葉舟」「博望燒屯」「替殺妻」の計十六種の題名に付されている。雑劇テキストの宣伝文句としては一般的なものであったことがうかがわれるが、その意味は必ずしも明確ではない。湯式の【一枝花】套「卓文君花月瑞仙亭」に「傳奇無準繩。關目是捏成。請監樂的先生自思省（〔司馬相如と卓文君の芝居の内容がでたらめであることについて〕芝居に決まりはない。『關目』はでっちあげ。音楽監督の皆さんご反省あれ」とあるのからすれば、ストーリーのことを言うように思われる。この単語は、『録鬼簿』に賈仲明が付けた「弔詞」にも多く見られる。例えば「弔王伯成」に「貶夜郎。關目風騷（「貶夜郎」の『關目』は洒脱）」と言い、「弔武漢臣」に「老生児、關目眞（「老生兒」の『關目』は真実味に富む）」と言うなど、やはりストーリーのことを言うように思われる。とすれば、これらの宣伝文句は「ストーリーがわかる」ということなのかとも思われるが、芝居の台本にわざわざそれを宣伝文句として付すのは不自然に思われる。後世の例だが、清の李漁の『閑情偶奇』「演習部」「變調」の「變舊成新」に、「體質維何。曲文與大段關目是已（〔前の芝居を美人に例える言葉を承けて〕体質とは何か。曲文と長い『關目』にほかならぬ）」とあるのは、明らかに説白、即ちセリフのことである。先に列挙したテキストがすべてセリフを多少は含んでいるものである点からすると、「セリフ入り」という意味である可能性も考えられるかもしれない。

元刊本末尾には「題目　張子房附耳妬隋何　正名　漢高皇濯足氣英布」とある。元刊本には題目で言うような展開があったものと思われるが、元曲選本には張良が耳打ちする場面はない。元曲選本は「題目　隨大夫銜命使九江　正名　漢高皇濯足氣英布」となっている。明代のテキストでは、「張子房附耳妬隋何」の情節が失われていたため改めたものか。また元曲選本は無名氏作とするが、これは曹本以外の『録鬼簿』や『太和正音譜』にこの雑劇が著録されていないので、『元曲選』の編者臧懋循に作者名を特定する手段がなかったためであろう。曹本『録鬼簿』のみ、巻上「尚仲賢」の項に「漢高祖濯足氣英布」として著録されている。また第一折は清の乾隆五十七年（一七九二）に成立した崑曲の曲譜『納書楹曲譜』に、第四折は『盛世新聲』『詞林摘艶』『雍熙樂府』にも収められる。作者とされる尚仲賢については、第五十六号掲載の「元刊雑劇の研究（一）『尉遲恭三奪槊』全訳校注」参照。なお、内府本に含まれる「運機謀隋何騙英布」は、同じ題材を扱った別の劇である。

ここで扱われている物語は、『史記』「黥布列傳」『漢書』「韓彭英盧吳傳」に見えるが、明代に刊行されたこの時代を扱う歴史小説『全漢志傳』『兩漢開國中興傳誌』には見えない。両書は元代に刊行されたが今は失われた『前漢書平話』の内容を伝えるものと思われるので、平話にはこの話が含まれていなかった可能性が高いことになる。その点で、この雑劇の内容が『史記』にほぼ忠実であることは興味深い。

《第一折》

〔止(正)末扮英布引卒子上、開〕ム(某)乃黥額夫□(英)布。□□霸王麾下鎮守着楊(揚)州六合淮地。漢中王有意東遷、衆臣子房已奏、陛下不可、有于子琪告變、不合襲於殿後。漢王不從、灑水大敗、折漢軍四十六萬片甲不回。

〔校〕○止末……鄭・徐・寧本は「正末」に改める。○□布……一字判読不能。徐・寧・鄭本は「英布」とする。○□□……二字判読不能。鄭本は「在楚」、徐本は「今在」、寧本は「佐于」とする。○楊州……鄭・徐・寧本は「揚州」に改める。○衆臣……徐本は「宰臣」、寧本は「重臣」に改める。○于子琪……徐本は「虞子期」、寧本は「虞子琪」に改め、鄭本は校勘記で「應作虞子期(「虞子期」とすべきである)」とする。

〔注〕○元曲選本にはこの前に劉邦と張良・隨何らのやりとりがあって、隨何の派遣が決まるが、この場面の存在は、元刊本からは確認できない。○黥額夫……『史記』巻九十一に「黥布列伝」「黥布者、六人也。姓英氏。秦時爲布衣。少年、有客相之曰、当刑而王。及壯、坐法黥(黥布は、六の出身である。姓は英氏。秦の時には平民であった。若い頃、彼の人相を見た人が、「刑を受けたら王になるに違いない」と言った。成人してから、法に触れて顔に入れ墨を入れられた)」とある。白話文学では英布の方が通りがいい。『兩漢開国中興傳誌』巻一で初めて登場する際には、「前有一將攔住去路、乃六安人、姓英名布(前の方で一人の将軍が道をふさいでおります。これぞ六安の人にて、姓は英、名は布)」と紹介される。○楊(揚)州……『史記』巻九十一「黥布列伝」に「立布爲九江王、都六(〔項羽が〕布を九江王に立て、六に都を置いた)」とあり、『兩漢開國中興傳誌』巻一には「封英布爲九江王六合四十五郡(英布を九江王として六合四十五郡に封じた)」と言う。○衆臣……この単語自体はよく用いられるものだが、「臣下たち」という意味になるので文脈にそぐわない。徐本や寧本の言うように重臣を意味する単語の誤りか。「臣下たちと子房が」というのでも取れないことはない。○子房……劉邦の参謀張良の字。『兩漢開國中興傳誌』『全漢志傳』では諫めるのは韓信となっており、やはり設定が異なるようである。○于子琪……虞美人の兄虞子期のこと。ただしその名の表記は一定せず、『全漢志傳』『西漢演義』では虞子期だが、『兩漢開國中興傳誌』では「虞子琪」となっており、また前二者では垓下の戦いで虞美人が自害したのに殉じて「撞死」

することになっているのに対して、後者では成皐を守っていて漢の軍に殺されることになっている。しかも『全漢志傳』には「于子琪」が成皐を守っていて殺される旨の記述もあり、表記を異にするだけの同一人物が二度死ぬことになっているが、おそらく『前漢書平話』では『兩漢開國中興傳誌』と同じ設定だったものを改変した結果、矛盾が生じたものと思われる。従って、「于子琪」という表記も必ずしも誤りとはいえない。〇四十六萬……『史記』巻七「項羽本紀」では「五十六萬」、『兩漢開国中興傳誌』では「五十餘萬」、『全漢志傳』では「五十萬」。〇片甲不回……軍隊が全滅すること。「黄鶴樓」（内府本）第一折「（諸葛亮云）貧道祭風、周瑜擧火、黄蓋詐降、燒曹兵八十三萬、片甲不回（私が風を起こし、周瑜が火を付け、黄蓋は降伏するふりをし、曹操の軍勢八十三万を焼き払って、鎧の切れ端も帰れないことにさせました）」など用例多数。この言い回しを用いた古い事例としては、南宋の鄭剛中の「定謀齊力疏」（『北山集』巻一）に「宜其一跌塗地、片甲隻輪之不返（一敗地にまみれ、鎧の切れ端、車輪の片割れも帰ってこなかったのももっともです）」がある。〇この部分の白はかなり元曲選本に近い。以下もしばしば元曲選本と共通する白が見え、この雑劇については元刊本にもかなりの白が見えることから考えても、早い時期にある程度白が固定していた可能性がある。

〔訳〕［正末が英布に扮し、兵士を連れて登場。開。］それがしは入れ墨男の英布でござる。覇王の配下にあって、揚州・六合・淮の地を守っておりまする。漢中王が東に向かおうといたしましたところ、大臣の張子房が上奏いたしましたことには、「陛下なりませぬ。于子琪が異変を告げますゆえ、後ろから襲いかかってはなりませぬ」。漢王はいうことを聞かず、濉水にて大敗し、漢の軍四十六万人を失って、一人も戻りは致しませんでした。

《仙呂》【點絳唇】楚將極多。漢軍微末△特輕可。戰不到十合。向濉水河邊破。

〔校〕なし。

〔注〕〇微末……多くは身分の低いことに用いられる。『三國志平話』巻中「徐庶曰、小生微末（原文は微求）之人、何所念哉（徐庶が申します。「私はつまらない人間ですから、お気に掛けられますな）」。元来は細かいこと。『孔子家語』巻八「辯學解」「小人之音則不然、亢麗微末、以象殺伐之氣（小人の音はそうではない。激しくて細かく、殺伐とした様子をかたどっているようである）」。勢力が微弱という意味で用いられた古い例としては、『通典』巻百九十六「邊防典」「托跋在北荒、部落主力微末（托跋は北の果てにいて、部族長の力は微弱である）」がある。「小可」と同じ意味の語と併用した例としては、曾瑞卿【端正好】「似斗筲之器般看得微末。似糞土之牆般覷得小可（斗筲の器なみに見下して、糞土の牆なみに軽く見る）」がある。

〔訳〕楚の将はまことに多く、漢の軍は力弱くいとも軽いもの。十回も手合わせせぬうちに、濉水のほとりに打ち破った。

【混江龍】今番已過。這回不索起干戈。主公倚仗着范增英布、怕甚

末韓信蕭何。我則待獨分兒興隆起楚社稷、怎肯交劈半兒停分做漢山河。［外云了］堦直下人來報、不由我嗔容忿ヌ（忿）、冷笑呵ヌ（呵）。［《云》］隋何來。他是漢家臣、這的是楚軍秦、他來這里有甚事。這漢好大膽呵。［怒唱］

［校］○主公倚仗着范增英布……元曲選本はこの句の前に「帶白」として「喈項王呵」の後、「憑着喈范增英布」とする。○外云了……元曲選本ではこの前に四字句を四句増句。このあたりから、『納書楹曲譜』は基本的に元曲選本と一致する。『元曲選』に基づいて、明末以降に崑曲のテキストが作られた可能性があろう。事実『納書楹曲譜』巻二「目録」末尾には『元曲選』についての言及があり、編者がこの書物を目にしていたことは間違いない（ただし、編者は『元曲選』に対して非常に批判的であるが）。「外云了」の部分は、元曲選本では「丑扮探馬上　卒做報科云……（丑が斥候に扮して登場。兵士が報告するしぐさをしていう）」。徐本はこのト書きを「探子云了」に改める。○堦直下人來報……元曲選本は「喈則見撲騰騰這探馬兒闖入旗門左」。○冷笑呵呵……元曲選本では、この句の前に探子とのやりとりがあり、隋何の到着が報告された後、「都付與冷笑的這呵呵」。「外」が探子なのか、臣下なのかは不明。ただしここで探子が登場する必然性はない。

［注］○已過……「王粲登樓」（古名家本）第一折【混江龍】「中年已過、百事無成（中年も過ぎたのに、何事もなしえず）」。また「范張雞黍」（古名家本）第一折に「（張元伯云）哥哥、今年已過、到來年九月十五日……（兄上、今年はもうこれでおわりですが、来年の九月十五日には）」とあり、また人がすでに死んでしまっていることを「亡化已過」「亡逝已過」という（「竇娥冤」第一折の白に両方の用例がある）ように、その状態がすでに発生したことをあらわすか。○我則待……元曲選本は「喈待要」。この前後、元曲選本は曲辞に見える「我」をすべて「喈」に改めている。後世の「俺」のように、「喈」に粗暴・傲慢なニュアンスがあるものと考えられていたようである。○獨分兒……用例を見ない言葉である。獨力でということか。○劈半兒停分……半分に分ける。「劈半兒」は「疋半」とも書く。「停分」はちょうど半分に分けること。「停」はいくつかに等分したその各部分のことを指す単語。「殺狗勸夫」（脈望館抄本）第一折【尾聲】「若不死了俺尊堂和父親。這家私和你疋半停分（もし母上と父上が亡くなっておられなければ、この財産はあなたと半分に分けたはず）」。ここで「停分」を用いているのは、初等教育書として白話文学に絶大なる影響を与えた唐の胡曾『詠史詩』の「鴻溝」に、「虎倦龍疲白刃秋。兩分天下指鴻溝（龍虎ともに疲れ果てた白刃ふるう秋、鴻溝を指して天下を二分した）」という句があり、広く行われていた陳蓋の注に「劉項爭天下、指鴻溝水爲二國之界、亭分天下（劉邦と項羽が天下を争った時、鴻溝の河を指して両国の境界とし、天下を二分した）」と見えることの影響か。○隋何……『史記』『漢書』では「隨何」。元曲選本も「隨何」とする。しかし、『兩漢開國中興傳誌』『全漢志傳』では「隋何」となっており、さきにあげた「騙英布」雑劇も同様であって、白話文学の世界ではこちらの表記が用いられることの

方が多かったようである。○怒唱……元刊本では、正末がうたう時に「唱」と書くこと自体比較的少ない。ましてこのように形容語を伴う例は大変珍しい。この雑劇には異例の卜書きが多く見られる。

〔訳〕こたびのことが終わったからには、今度は戦をおこすに及ぶまい。殿は范増・英布を頼みとされる以上、韓信・蕭何など恐れるに足りぬ。わが一人の力にて楚の国をば盛り立ててくれようものを、どうして半ばを割いて漢の国土としたりできようか。〔外いう〕きざはしの下に来た者の知らせ聞き、思わず憤怒の形相すさまじくも、ハハハと冷ややかに笑う。

〔正末いう〕隋何が来たとな。奴は漢の臣、ここは楚軍のとりで。ここに何しに来おったのじゃ。こやつまったくいい度胸じゃ。(怒って唱う)

【油葫蘆】這漢似三歳孩兒小覷我。怎生敢恁末。是他不尋思到此怎收羅。恰便似寒森ヌ(森)劍戟傍邊過。有如他明彫ヌ(彫)斧鉞叢中坐。是他忒不合。忒聘(騁)過。恰便似个飛蛾兒急颩颩來投火。便是他自攬下一頭蹉。

〔校〕○聘過……鄭・徐・寧本は「騁過」に改める。元曲選本は「他可也忒放潑」とする。○便是……元曲選本は「這的是」とする。なお徐本には「便」がない。単純な誤りであろう。

〔注〕○不尋思……考えなし。「介子推」(元刊本)第三折【上小樓】「今日个不尋思、就就死、擎王保駕(今日考えなしに死んで、とのをお守りするか)」。○收羅……収拾する。「焚兒救母」第二折【禿厮兒】「人穰穰、鬧呵呵、無个收羅(人はざわざわ、わいわい騒ぐ中、収拾もつかない)」。○騁……思い切り行う、発揮する。『董西廂』巻一【吳音子】「騁無賴。傍人勸他又誰偸保(無賴の限りをつくし、人がなだめようと相手にせぬ)」、「單刀會」(元刊本)第一折【鵲踏枝】「他誅文醜騁粗懆(彼は文醜を誅して粗暴さを発揮し)」、「紫雲庭」(元刊本)第二折【菩薩梁州】「直這般顯相貌騁威勢(こんな風に顔を出して〔?〕威張りちらして)」、『朱子語類』巻第一百八「論治道」「今日之法、君子欲爲其事、以拘於法而不得騁(今の法では、君子がしたいことをしようとしても、法に縛られて思うようにできぬ)」。○飛蛾投火……飛んで火にいる夏の虫。張協「雜詩」(『文選』巻二十九)に「蜻蛚吟階下、飛蛾拂明燭(コオロギは階の下にうたい、蛾は輝く燭を払う)」とあるのが、類型表現では古い例。より近い例としては、黄庭堅「演雅」に「飛蛾赴燭甘死禍(蛾は燭に向かい死ぬのをいとわぬ)」、宋の熊克の『中興小紀』巻三十六に「人苟無識、一味貪進、往往如飛蛾投火、隨焰而滅(人はもし識見がなければ、むやみと出世しようとして、しばしば飛んで火にいる夏の虫と、炎につれて滅びることになってしまう)」とあり、宋代には成語として用いられていたらしい。「對玉梳」第二折【倘秀才】「這厮他不知死飛蛾投火(こやつは飛んで火にいる夏の虫)」など、白話文学の用例は多い。

〔訳〕こやつめわしを三歳の子供なみに見て、どうしてこんなことをしでかしおるのか。やつめが考えなしなことをしでかしたか

らには、もはや取り返しはつかぬ。さながらに、震え上がらんばかりに冷たく輝く剣戟のそばを行き、きらきら輝く斧鉞の群れなす中に座るが如きもの。あまりといえばあまりの無法、あまりの向こう見ず。さながらに蛾がひらひらと自分からともしびに飛び込むが如く、やつめが自ら招いた大しくじりじゃ。

【天下樂】這漢滅相自家煞小可。如還我。不壞了他。則俺那楚王知到做了咱的罪過。他待要使見識、厮勾羅。不由我按不住心上火。

〔《云》〕小校那里。如今那漢過來、持刀斧手便與□(我)殺丁(了)者。交那人過來。〔等隋何過來見了〕〔唱賓〕住者。你休言語。我根前下説詞那。〔等隋何云了〕

〔校〕○自家……寧本は「咱家」に改める。○知到……鄭本は「知道」に改める。○不由……元曲選本「却教嗜案不住心上火」。ある程度一致するのはこの句のみで、他は全く異なり、しかも一句多い。『納書楹曲譜』は基本的に元曲選本と一致。○與□殺丁者……鄭本は「與□□□了者」。覆本が「殺」をも欠字にすることに由来する。徐本・寧本は「與我殺了者」。

〔注〕○滅相……軽視する。「西蜀夢」(元刊本)第二折【牧羊關】「咱西蜀威風。俺敢將東吳家滅相(われら西蜀の威風、東呉を軽んじてくれよう)」。「博望燒屯」(元刊本)第三折【沽美酒】「可不人不得滅相。死尸骸臥在雲陽(まことに人をあなどってはならぬとはこのこと〔?〕。屍は刑場に横たわることとなる)」。○勾羅……元曲選本は、この後の【鵲踏枝】第二句「你那里話兒多。着言語厮多羅」を「你那裏話兒多。厮勾羅」とする。この例から見ると誘惑することかと思われるので、仮にそう訳しておくが、他に用例がない。○唱賓……『明史』巻五十六「禮志十」「鄉飲酒禮」に「贊禮唱賓酬酒、賓起、……(典礼係が「唱賓」して返杯すると、客は立ち、……)」。式部官が号令をかけて、賓客との対面の儀礼を行うことか。この種のト書きは他に例がない。○下説詞……弁舌をふるう。「賺蒯通」(内府本)第四折に「(樊噲云)此人不可問。他若問必然下説詞也(この者に問うてはなりませぬ。問えば必ず弁舌をふるいましょう)」と、ほとんど同じ言い回しが見える。定型化した表現なのであろう。

〔訳〕こいつがわしになめた真似をしてくれるのは大したことではないが、もしもわしがやつを殺さねば、楚王に知られたらわが身のとがにされようぞ。やつは悪知恵にものいわせ、誘惑しようとしおる。心中の怒りの炎を押さえかねるわ。

〔正末いう〕当番兵はどこじゃ。やつが来たら、首切り役人を連れてきて殺してしまえ。あの者を通せ。〔隋何が来て会うしぐさ〕〔接見の礼を行う〕待て。しゃべるな。わしの前で弁舌を披露しようというか。〔隋何がいう〕

【那吒令】三對面先生行道破。那里是八拜交仁兄來探我。是你个兩賴子隋何來説我。〔等外云了〕你待要着死撞活。將功折過。你休那里信口開呵。

〔校〕なし。

〔注〕○三對面……他に用例のない言葉。許少峰『近代漢語詞典』は「指兩面討好。連自己爲三面、也卽兩頭三面（二股かけることを言う。自分も合わせて三面になるので、『兩頭三面』（あちこちにいい顔をする）ということにもなる」とし、『漢語大詞典』は「三對面先生」で「説客」とするが、いずれも挙例はこれのみ。なおこの句を元曲選本は「嗜道你這三對面先生来瞰我」とし、「わしに言わせればおぬしという『三對面先生』が会いに来たというもの」として、次の句への接続をスムーズにしている。○兩賴子……徐本の校記に宋の荘季裕の『雞肋編』巻中に見える「元祐末、已有紹述之論。時來之邵為御史、議事率多首鼠、世目之爲兩來子（元祐年間の末には、新法に復帰しようという論があった。この時來之邵は御史であったが、その議論には二股膏薬が多かったので、世の人は『兩來子』と呼んだ）」を引く。『宋元語言詞典』は更に「謝金吾」（元曲選本）第二折【梁州第七】「都是這兩賴子調度的軍馬、你可甚麼一管筆判斷山河（みなこの「兩賴子」〔敵の間者の王枢密をさす〕が手配した軍勢じゃ、何が筆一本で天下を治めるやら）」を引き、「猶無賴」とするが、「謝金吾」の例からもやはり二股膏薬と取る方がよいであろう。○將功折過……手柄と失敗を相殺する。「將功折罪」ともいう。『老乞大』上「將出免帖來毀了、便將功折過、免了打。若無免帖、定然喫打三下（〔寺子屋で暗誦がうまくできると免状をもらえるが、次にできないと〕免状を取り出して破いてしまいますが、手柄と失敗を相殺するということで叩かれずにすみます。免状がなければ、必ず三度ぶたれます）」。

○信口開呵……「開合」と表記する例が多く、「開喝」も見られる。元曲選本はこの句を「一謎裏信口開合」とする。「魯斎郎」（古名家本）第四折【折桂令】「休只管信口開合（口からでまかせ言うでない）」、張養浩【新水令】「辭官」【離亭宴煞】「非是俺全身遠害、免教人信口開喝（明哲保身気取るでないが、人からでたらめ言われずにすもう）」。なお、「開呵」「開喝」は、芝居の前口上のこと。音から転じてそうした意味を持つという意識が生じている可能性がある。現代では「開河」という表記が一般的。

〔訳〕二股膏薬先生にはっきり申し上げる。兄弟のちぎり結びし兄上の来訪などであるものか、首鼠両端はかる悪党の隋何めが説得しに来おったのじゃろう。（外云う）命がけにて、手柄でしくじりの埋め合わせしようなどと、口から出任せ申すでない。

【鵲踏枝】你那里話兒多。着言語厮多羅。你正是剔蝎撩蜂、暴虎馮河。誰交你自創入龍潭虎窩。飛不出地網天羅。

〔校〕○多羅……鄭・寧本は元曲選本にならって「勾羅」に改める。○創入……鄭本は「闖入」、寧本は「撞入」に改める。○你～天羅……元曲選本は「鑽頭就鎖，也怪不的嗜故舊情薄」と全く異なる。

〔注〕○多羅……ここではくどくど言うことのように見える。他の用例としては、「爭報恩」（元曲選本）第三折【聖藥王】「我可也千不合、萬不合、一時間做事忒多羅（私は本当にまずいことに、とっさにやることがあまりにも「多羅」だった）」があるのみ。ここでは軽率に梁山泊の好漢と義兄弟の契りを結んだことを言う。

あるいは「對玉梳」（古名家本）第二折【倘秀才】（原本は曲牌名を欠く）「甜句兒將我緊兜羅、口如蜜鉢（甘い言葉で私をしっかとたぶらかす、その口は蜜を入れたたらいのよう）」、「謝金吾」（元曲選本）第二折【烏夜啼】に「但有攙搓、誰與兜羅（思いも掛けぬことが起きたら、誰がうまく言ってくれようか）」と見える「兜羅」と同じかもしれない。とすれば、「うまく言う、とりなす」といったところか。その場合「争報恩」の用例の意味が取りにくいが、あるいは「甘いことを言い過ぎた」といったことかもしれない。○剔蝎撩蜂……自分の方から災いを招くようなことをするたとえ。「襄陽會」楔子【賞花時】「他不合剔蝎撩蜂尋鬪爭。我這里布網張羅打大蟲（やつめは不届きにもさそりを刺激し蜂の巣つついて戦い求め、こちらは網を張って虎を捕らえる）」など。○暴虎馮河……素手で虎を捕まえようとしたり、徒歩で川を渡ろうとするような無謀な行為をたとえる。もとは『毛詩』小雅「小旻」「不敢暴虎。不敢馮河。人知其一。莫知其他。戰戰兢兢。如臨深渕。如履薄氷（素手で虎を捕らえたりはできぬ。徒歩で黄河を渡ったりはできぬ。人は一のみ知って、その他を知らぬ。深い淵に臨むが如く、薄氷を踏むが如し）」に見えるが、元曲に見えるのは『論語』「述而」の「暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也（暴虎馮河の振る舞いをして、死んでも後悔しないような者には、仲間入りできぬ）」に基づくのであろう。「竹葉舟」（元刊本）第二折【尾】「唱道暴虎馮河、學屠龍袖手（げにも暴虎馮河の振る舞いなし、龍屠る技身につけつつもそれを隠し〔？〕）」など。○創……鄭本は「闖」、寧本は「撞」に改めるが、「黄鶴樓」第一折【油葫蘆】に「喈正是低着頭往虎窟龍潭創。却正是合着眼去那地網天羅裏撞（我らはまさしく頭を下げて虎や龍のすみかに突っ込み、まさしく目をつぶって天地にめぐらせた網の中へと突入すると申すもの）」とあり、「闖」の当て字として「創」がしばしば用いられるのではないかと思われる。○龍潭虎窩……龍や虎が住んでいる危険な場所をいう。「遇上皇」（元刊本）第四折【折桂令】「不做官我怕的是鬧炒（炒）虎窟龍潭（役人にはなりませぬ、私がこわいのは騒々しい虎や龍のすみか）」、『西廂記』（弘治本）巻二第二折【滾繡毬】「大踏歩直殺出虎窟龍潭（大股に虎や龍の住みかからまっしぐらに脱出する）」ほか。○地網天羅……法などが厳しく、容易に逃げられないことを形容する。「東窗事犯」（元刊本）第一折【鵲踏枝】「試打入天羅地網。待交俺九族遭殃（天地にめぐらした網に放り込んでみて、われらの九族までも災いにあわせようとする）」、「紫雲庭」（元刊本）第三折【哨遍】「怎出俺這打多情地網天羅（私たちが天地に張りめぐらした色好みをとらえる網からどうして出られよう）」ほか。

〔訳〕お前はそこで無駄口をたたき、うまい言葉でたらし込もうとしおるが、お前がしていることこそ自分から災いを招き、蛮勇を頼みにした無謀な行為というもの。自分から龍虎の住まいに突っ込み、天地に張りめぐらしたわなから飛び出ることもかなわぬ羽目に落ち込みおったわ。

【寄生草】你將你舌尖來扛、我將我劍刃磨。我心頭怎按無明火。我劍鋒磨的吹毛過。你舌頭便是亡身禍。你道是特來救我目前憂、嗷你正是不知自己在壕中臥。

〔《云》〕你道是救我來。你説我有甚罪過。〔等外云三个死字了〕〔做背驚云〕打呵打着實處、道呵道着虚處。這漢怎生知道。我雖有這罪過、如今赦了我也。〔等天臣上去(云)了〕

〔校〕○上去了……鄭・徐・寧本は「上云了」に改める。○死字了……鄭本には「了」がない。○我雖有……鄭本は「我或有」とする。覆本の誤りに由来するものである。○去了……鄭・徐・寧本は「云了」に改める。

〔注〕○扛……口答えすること。元曲には他に用例がない。『金瓶梅詞話』第五十二回「教我扛了幾句（ちょっと言ってやろう）」。○吹毛過……『水滸傳』第十二回において、楊志が刀を売るとき、宝刀たる第二のゆえんとして「吹毛得過」と述べ、「就把幾根頭髪望刀口上只一吹、齊齊皆斷（髪の毛を何本か刃に向けて一吹きしただけで、みんな切れてしまう）」と説明するように、吹き付けた毛も切れるような鋭い切れ味。唐の李頎の「崔五六圖屏風各賦一物得烏孫佩刀」という詩に、「烏孫腰間佩兩刀、刃可吹毛錦爲帶（烏孫国の人は腰に両刀を帯び、その刃は吹き付けた毛も切れるほどで、錦を下げ緒にしている）」、杜甫の「喜聞官軍已臨賊境二十韻」に「鋒先衣染血、騎突劍吹毛（先鋒の衣は血に染まり、突撃する騎兵の剣は吹き付けた毛も切れる鋭さ）」とある。元曲における用例としては、「黄粱夢」（古名家本）第四折【笑和尚】に「來來來寶劍似吹毛過（さあさあさあ宝剣は吹き付けた毛も切れる鋭さ）」など多数がある。○亡身禍……馮道の作とも言われる「舌詩」に「口是禍之門、舌是斬身刀。閉口深藏舌、安身處處牢（舌は身を斬る刀、口は災いの元。口を閉ざして舌を深くしまいこめば、いつでも身は安泰）」とあり、以後成語として頻用された。「酷寒亭」（古名家本）第三折【烏夜啼】「憑着我在口言是忘（亡）身禍。言多語少。小人有些九陌風魔（げにも口にある言葉は災いの元。言葉が多いか少ないか、わたくしちと頭がおかしいようで）」ほか。○壕中臥……墓穴に横たわること。「西蜀夢」（元刊本）第三折【哨遍】「爭奈小兄弟也向壕中臥（困ったことにはわたくしも穴の中に横たわる身）」。○打呵打着實處。道呵道着虚處……「肝心なところを打ち当て、抜かったところを言い当てられた」ということで、痛いところを突かれることであろう。

〔訳〕お前は舌先で盾ついてくるが、わしはわしの剣を研いでいる。わが心中の怒りをどうして押さえられよう。わが剣は研ぎすまされてたいした切れ味。お前の舌は身を滅ぼす災いのもと。お前はわしの憂いを解決しにわざわざ来たというが、オーお前こそ自分の命が危ういことを知らぬのではないか。

〔正末いう〕お前はわしを助けに来たと言うが、わしにどんな罪があるというのじゃ。〔外が三つの「死」のことをいう〕〔正末驚いて傍白〕これは痛いところを突かれたわ。こやつはどうして知っているのであろう。わしにはその罪があるにはあるが、今では赦されておる。〔使者が登場していう〕

【玉花秋】那里發付這殃人貨。勢到來怎生奈何。楚國天臣還見呵。其實也難收斂怎求和。[《云》] 小校裝香來。[《唱》] 我與你一下里相迎你且一下里趂。[《云》] 你且兀那屏風背後趂者。[等使命開了] [《云》] 我道楚使來取我首級、却元來不是、到赦了我罪過。

〔校〕なし。

〔注〕○殃人貨……ろくでなし。杜仁傑【耍孩兒】「莊家不識勾闌」「中間裏一箇央人貨（中に一人のろくでなし）」。「焚兒救母」（元刊本）第二折【鬼三台】「那里哭的聲音大到來日只少个殃人貨（どうして大声上げて泣いたりしよう。明日になればろくでなしが一人減るだけのこと）」。○勢到來……「事ここに至っては」の意であろう。「漁樵記」（元曲選本）第四折「（劉二公云）勢到今日、你不説開怎麽（今のようなことになったからには、説明せずに何とする）」というように、「勢到今日」の形で用いられることがあるが、同じ「漁樵記」の息機子本でこの箇所が「事到今日也、你不説開做甚麽」となっているように、「事」と「勢」が通用して用いられるようである。○難收斂怎求和……元曲選本は「難廻避怎收撮」とする。「收撮」は終わらせる、けりを付けるといった意味。「收斂」も同じような意味であろう。

〔訳〕このろくでなしをどう始末したものか。事ここに至ってはなすすべなし。楚国のみかどの使いにもし見られたならば、実際収まりはつかず、どうにもならない。[いう] だれか香の仕度をせい。[うたう] わしはあちらに迎えに行くゆえ、お前はこちらでひとまず隠れておれ。

[いう] お前はとりあえず屏風のうしろに隠れておれ。[使者口上をいう] [（正末）いう] わしは楚の使者がわしの首を取りに来たと思っていたが、なんだ、そうではなくて、わしの罪を赦してくれたのか。

【后亭（後庭）花】不爭這楚天臣明道破。却把你个漢隋何謊對脱。[《云》] 去了天臣呵。《唱》我如今喚你來從頭兒問、隋何看你支吾咱説箇甚末。這風波。忒來的歇禍。元來都番成他的佐科。

〔校〕○元來都番成他的佐科……「佐科」を鄭本は「作科」、寧本は「做科」に改める。元曲選本ではこの句は「且看他這一番怎做科。那一番怎結末」となっている。

〔注〕○對脱……元曲には他に用例がない。この句、「隋何が嘘をついてごまかそうとする」「隋何の嘘がばれてしまった」両様の解釈が可能だが、前者では「把」が宙に浮き、後者では通常副詞的に用いられる「謊」が重い名詞になって問題が残る。ここでは仮に後者の方向で訳しておく。○歇禍……徐本の校記では、「梧桐雨」（古名家本）第四折【滾繡毬】「向青翠條。碧玉梢。碎聲兒畢剥。增百十倍、歇和芭蕉（緑の枝、エメラルドの梢に、バラバラとした音を立て、何十倍にもなって、芭蕉に集まる）」という「歇和」、「梧桐葉」（顧曲斎本）第三折【煞尾】「怎當他、協和芭蕉夜窗雨（たまらないのは、芭蕉に集まる夜の窓の雨）」という「協和」、「爭報恩」第三折【鬬鵪鶉】「打道子的巡軍每葉和（見回りの兵隊たちが集まってきた）」という「葉和」と通じるのではないかとする。

『元語言詞典』は「折よく」という意味だとするが、副詞として用いられる時にはそうした意味になると考えればよいであろう。○佐科……おそらく通常は元曲選本のように「做科」と表記される単語であろう。曾瑞の【鬬鵪鶉】「風情」に「强做科撒拈。硬熱戀白沾」、睢景臣【六國朝】「収心」に「將俺拘鉗。做科撒阽」とほぼ同じ言い回しが見える。ともに妓女との擬似恋愛をテーマとした散曲であり、意味は定かではないが、前者は「むりやり『做科撒拈』し、どうでも『熱戀白沾』しようとする」ということであり、後者は「我々をとりこにして、『做科撒阽』する」ということになる。「熱戀」と対になる点からすると同じ方向性を持つかとも考えられるが、「科」が芝居のしぐさを指す単語である点からすると、「芝居をする」、つまり本心ではなく演技でほれたふりをすることである可能性もある。ここでは仮にその方向で訳しておく。

〔訳〕いかんせん楚の使者がはっきりと言ったがために、隋何のうそがばれてしまった。〔いう〕使者が帰ったら、〔うたう〕お前を呼び出し逐一問いただすことにしよう。隋何め、お前はわしをごまかしてどんな言いわけをするのやら。この騒ぎばかにタイミングがいいと思えば、なんとすべてはやつの芝居だったのか。

〔等外出來共使命相見了〕〔做門外猛見科、《云》〕這漢大膽麽。誰請你來、自走出來了。〔做共外打手勢科、《云》〕你且藏者。

〔校〕なし。

〔注〕○正末の「你且藏者」のせりふのあとで、外が楚の使者を殺すものと思われる。元曲選本でもこの部分で使者が殺される。

〔訳〕〔外が出てきて使者に会う〕〔正末が門の外ではっと目に入れていう〕こいつはなんと大胆な。呼ばれもせぬのに、自分で出てきおった。〔正末が外に合図するしぐさをしていう〕とりあえず隠れておれ。

【金盞兒】諕的我面沒羅。口答合。想伊膽到天來大。料應把那口吹毛過的劍先磨。坑察的着咽脛(頸)、血瀝(瀝)ヌ(瀝)帶着肩窩。不爭你殺了他楚使命、則被你送了我也漢隋何。

〔校〕○料應……元曲選本は以下の三句が全く異なる。○坑察……徐・寧本は「圪察」に改める。○咽脛……徐・寧本は「咽頸」に改める。

〔注〕○面沒羅……呆然として無表情になること。「調風月」(元刊本)第二折【朱履曲】「又不風又不呆癡。面沒羅呆答孩死堆灰(狂ったわけでも馬鹿でもないが、無表情にぼんやりと燃え尽きた灰のよう)」、「西蜀夢」(元刊本)第三折【石榴花】「今日臥蠶眉瞇定面沒羅。却是鳴(爲)何(今日太い眉の下から無表情にじっと見るのはなぜ)」など。○口答合……徐本校記は前項で引いた「調風月」の例「面沒羅呆答孩」を引き、「答合」は「答孩」に同じとする。○坑察……ガチャ。徐・寧本は「圪察」に改めるが、擬音語ゆえ多様な表記が許容されるであろうから、改める必要はないであろう。『劉知遠諸宮調』二【快活年尾】に「把頭髮披開砧子上。斧擧處諕殺劉郎。救不迭扢插地一聲響(髪をきぬたに広げ、斧が

上がれば劉郎はびっくり仰天、助ける間もなくガチャッと音は響く)」とあるのは、また異なった表記を用いた例である。

〔訳〕驚いて顔は呆然、口はあんぐり。何と大胆不敵な奴じゃ。かの切れ味鋭い剣を前もって研いでおったに相違ない。ガチッと喉首めがけ、血しぶきあげて袈裟懸けに肩まで斬り下ろす。まいったことにお主が楚の使者を殺したからには、お主のせいで一巻の終わりじゃ、漢の隋何め。

〔《云》〕拿着那漢者。這人大膽、俺楚家使命、你如何敢殺了他。〔等外云了〕〔《云》〕我門外搖着手、意里道你且休出來、且藏者。我幾時交你殺了他使命來。〔等外再云了〕〔怒云〕小校拿着這漢。咱見楚王去來。〔等外云了〕〔做慘科〕〔背云〕我若拿將這漢見楚王去、這漢是文字官、不曾問一句、敢説一堆老婆舌頭。我是个武職將、幾時折辨過來。〔做尋思科、住〕

〔校〕○我門外搖着手意里道你且休出來……徐・寧本は「我門外搖着手做意里。道你且休出來」に改める。

〔注〕○文字官……元曲には例がないが、曾鞏「英宗實録院申請」に「又曾乞差中書樞密院編文字官(また以前に中書枢密院編文字官を派遣されるようお願いいたしまして)」など、宋代には文書を扱う官職として半ば公式の名称であったらしく、用例が多い。ここでは文官のことであろう。○老婆舌頭……「女房の舌」ということで、ぺらぺらとしゃべることであろう。「劉行首」(古名家本)第三折「(林員外云)這先生倒會管老婆舌頭(この道士は口が達者だ)」。元曲選本のこの箇所の正末の白は、「喈若拿那厮見項王去、那厮是能言巧辯之士、口里含着一堆的老婆舌頭(わしがあいつを捕まえて項王に会いに行ったら、あいつは雄弁家で、口に『老婆舌頭』をたっぷりもっているから)」とかなり似通ったものになっている。○武職將……この形での用例は他に見つからないが、明の萬民英の占い書『星學大成』巻十五に「中犯煞者便爲武職將軍之位(中が煞〔人相用語〕を犯していれば、武職将軍の位につく)」とあり、清代においては「武職將軍」の例が公文書にも多く見られる。おそらく元代にも民間では用いられていた語だったのであろう。○折辨……古い例としては、阮籍の「達莊論」に「折辯者毀德之端也(議論は徳を台無しにするきっかけ)」とあり、また『三国志演義』(嘉靖本)巻二十三「姜維祁山戰鄧艾」には、「望自知有此變法、實不曾學全、乃勉强折辯曰、吾不信、汝試變來(司馬望はこのような陣形変化の仕方があることは知っていたが、実は全部身につけてはいなかったので、やむなく無理に強弁して言った。『信じられぬ。変えて見せよ』)」とある。議論する、あるいは自分の立場を主張することであろう。なおこの語は、元曲選本の「竇娥冤」「張天師」において、ともに裁き手に対して自己の立場を主張する意味で用いられているようであるが、実はいずれも元曲選本にしか見えない部分であり、他のテキストにはこうした例はない。○住……「住」は元刊本に頻出する用語であるが、意味は定かではない。字義から考えて、また周憲王朱有燉の「牡丹品」末尾に、明らかに音楽が終わることをさして「樂住」というト書きがあることから見ても、前の動作が終わることを

いうのかとも思われる。

〔訳〕〔正末いう〕かの者を捕えよ。こやつ大胆な、われらが楚の使者を何ゆえに殺してのけたのじゃ。〔外いう〕〔正末いう〕わしが外で手を振ったのは「しばらく出てくるな、隠れておれ」と言ったつもりだったのに、わしがいつお主に使者を殺せと言ったというのじゃ。〔外再びいう〕〔正末怒っていう〕だれか、こやつを捕えよ。わしは楚王に会いに行く。〔外いう〕〔正末驚くしぐさ。傍白〕わしがこやつを捕えて楚王に会いに行けば、こやつは文官、一言も問われぬうちに、ペラペラしゃべりまくるにちがいない。わしは一介の武将、どうして言い負かせよう。〔考えるしぐさ〕

【鴈兒】楚王若是問我。〔《云》〕英布、他是漢家、咱是楚家。你不交書叫他去沙、他如何敢來。〔《唱》〕到底難將伊着末。你恰施劣缺、顯雄合。你个哥。〔《云》〕吱你殺了他楚使。〔《唱》〕却不道我如何。〔《云》〕似此怎生了。〔等外云降漢了〕〔《云》〕你交我降你漢家。這楚王不曾虧我。我便降漢、肯重用麼。〔外云了〕

〔校〕○你个哥……元刊本は小字にする。○到底～却不道我如何……この部分、元曲選本は全く異なる。「他怎敢便帶領着二十人、到軍寨里鬧鑊鐸。那其間哥。可教喈答應是如何」。

〔注〕○着末……つかまえること。「捉摸」に同じ。「紫雲庭」（元刊本）第三折【粉蝶兒】「我本是个邪崇(崇)妖魔。他那俏魂靈到(倒)將咱着末(私がもともと人にとりつく妖魔のはずだったのに、あの粋な魂はこのわたくしをとりこにしてしまいました)」。○劣缺……猛々しいこと。「拜月亭」第三折【倘秀才】「不似俺、忒喃嘸。劣缺（うちのお父さんのようにえげつなく猛々しい人はいまい）」ほか。○雄合……未詳。用例なし。「勇猛」の意か。

〔訳〕楚王がもしわしに問わば、〔正末いう〕「英布よ、やつは漢のもの、われらは楚のもの。お主がやつに手紙を出して呼んだのでなければ、やつらにくる勇気があるはずはあるまい」。〔うたう〕結局お主をつかまえることはなるまい。お主は今しがたとんでもないことをやらかし、勇猛果敢ぶりを発揮した。兄上よ。〔正末いう〕お主が楚の使者を殺してしまっておきながら、〔うたう〕わしがどうなるかは考えもせぬのか。

〔正末いう〕こんなことではどうすればよいのだ。〔外が漢に降れという〕〔正末いう〕お主はわしに漢に降れと言うが、楚王はわしに済まぬことをしたことはない。わしが漢に降ったとしても、重用してもらえようか。〔外がいう〕

【收尾】休把我厮催逼、相攛掇。英布去今番去波。我若是不反了重瞳楚項藉(籍)、赤緊的做媳婦兒先惡了翁婆。怎存活。便似睜着眼跳黄河。你則着我歸順您君王較面闊。你這里怕不千般兒啜摩。却將我一時間謾過。交人我則怕你沒實誠閑話我赤心多。〔下〕

〔校〕○收尾……元曲選本・鄭・徐・寧本は「賺煞」とする。○英布去今番去波……徐本は元曲選本に従って「英布也今番去波」とする。○我若是不反了重瞳楚項藉……元曲選本は「不爭我服事重瞳沒箇結果」と異なる。○交人……鄭本は「交人道」、徐・寧本

は「友人」に改める。元曲選本にはこの語なし。○沒實誠閑話我赤心多……元曲選本は「弄的喒做了尖擔兩頭脱」と異なる。

〔注〕○英布去今番去波……徐本が元曲選本に従って「英布也」と改めるのは、「去」の重複を不自然と見るためであろう。このままでもあせった語感が出るようにも思われるので、とりあえず原文のまま訳しておく。○我若是不反了重瞳楚項藉……元曲選本が異なった本文を持つのは、この句が通常は押韻箇所であることに由来するものであろう。○翁婆……舅と姑のこと。『太平廣記』巻三百三十二「唐晅」に、「須臾聞扣門聲。翁婆使丹參傳語令催新婦、恐天明冥司奪責（すぐに戸を叩く音が聞こえてこう言った。『舅様と姑様が丹參に御伝言を託されました。新婦様には早くお帰りください、夜が明ければ冥土の役所にしかられるだろうとのことです』）」、また『夷堅志』戊巻四「太陽步王氏婦」に、「批曰、本人奉事翁婆孝謹兼冥數未盡、宜放還（こう書き付けてあった。『この者は舅姑によく仕え、しかも寿命がまだ尽きていないのだから帰すのがよい』）」。ただし元曲には例がない。元曲選本は「公婆」とする。○存活……生きていく。打ち消し・反語などの形で用いられることが多い。『董西廂』巻六【石榴花】「算無縁得歡喜存活、只有分與煩惱做冤（思うに楽しく生きていく運命にはなく、悲しみ恨む定めあるのみ）」、『西廂記』（弘治本）巻二第四折【殿前歡】「若不是一封書將半萬賊兵破。俺一家兒怎得存活（もし一通の手紙にて五千の賊軍を打ち破ってくれねば、私ども一家がどうして生き延びられたでしょうか）」、「紫雲庭」（元刊本）第三折【鮑老兒】「我毎日千思萬想、く（行）眠立吨、不是存活（毎日あれこれ考えて、歩きつつ眠り立ちつつうたた寝、生きていけぬ有様）」ほか。○啜摩……他に例のない言葉だが、「啜哄」「啜賺」同様、だますことか。元曲選本は「揣摩（忖度する）」とする。○交人……このままでは意味が取れない。しかし諸本のように改めても明快に意味が通るわけではなく、また改める根拠も特にない。とりあえずこの二字を除外して訳しておく。この後の部分も理解しやすいとはいえず、元曲選本においてこの句が全く異なるのは、理解不能であったためかもしれない。仮に下のように訳すが、「お主が誠意もなく自分ばかりが誠実だといい加減なことを言うのが心配される」とも解釈可能である。

〔訳〕わしに迫るな、言葉巧みに唆すな。英布はまいる、これよりまいろうぞ。わしがもし二重瞳孔の楚項籍に背かねば、まったく嫁入り早々舅姑を怒らせたようなもの、生きてはいけぬ。さながらにみすみす黄河に身を投げるようなものじゃ。お主は自分の主君の方が寛大だとてわしを帰順させようとしおるが、お主の方ではあの手この手でだましすかして、わしを一時欺いておるのではあるまいな。ただ心配するのはお主が誠意なくいい加減なことばかり言い、わしばかりが誠実なことじゃ。

《第二折》

〔正末上《云》〕隋何、咱閑口論閑話、這里離城皐關則是一射之地。你言請我降漢、交天子擺半張鸞(鑾)駕出境來接、兀的天子爲甚不來接。〔等外末云了〕〔《云》〕你是个謊説的好。

〔校〕○城皐關……鄭・徐・寧本は「成皐關」に改める。元曲選本も同じ。○鸞駕……鄭・徐・寧本は「鑾駕」に改める。元曲選本も同じ。

〔注〕○閑口論閑話……無駄話をする。「救風塵」(古名家本)第三折白「(正旦云)小閑、咱閑口論閑話。這好人家好擧止、惡人家惡家法(太鼓持ちさん、ちょいとおしゃべりしていきましょう。よい家は振る舞いもよく、悪い家は悪い決まりとやら)」など。○城皐……成皐のこと。河南省滎陽近辺にあたり、漢楚の戦いの激戦地であった。「三国志」物語で有名な虎牢はこの地に当たる。城皐関は虎牢関のことであろう。『史記』巻九十一「黥布列傳」に引く隨何の弁舌に、「漢王収諸侯還守成皐・滎陽……、楚兵至成皐滎陽、漢堅守而不動……(漢王は諸侯を配下に入れ、退却して成皐・滎陽を守り……、楚の軍が成皐・滎陽に来ても、漢は堅く守って動こうとしなければ……)」。元曲選本のこの部分には、「(正末云)……一路行來、漸近成皐關了、怎不見漢家有甚麼糧草供應、人馬迎接(旅を続けて、成皐関に近づいてきたが、漢の方から兵糧など寄こしもしなければ、出迎えの人馬もおりはせぬ)」とある。○一射之地……矢が届くほどの距離を隔てた場所。百二十～百五十歩という。『三國志平話』巻上「約離城一射之地(城壁からの射程距離ほど離れ)」、『西廂記』(弘治本)第二巻第一折「(生云)……可按甲束兵、退一射之地(武器を片づけて、矢の射程距離ほど離れてくだされ)」ほか。○半張鑾駕……天子の儀仗の半分。「追韓信」第三折【石榴花】「把(擺)列着半張鑾駕迎韓信。這的是天子重賢臣(皇帝の半分の儀仗にて韓信をお出迎え、これぞ天子は賢臣を重んずと申すもの)」。

〔訳〕〔正末登場〕隋何よ、我らは無駄話でもしながら行くことにしよう。ここは成皐關まで矢の射程ほどしか離れておらぬ。お主は、わしに漢への降伏を願うたかぎりは、賢臣を迎える儀仗を用意し、天子に国境を越えて迎えに出させると言ったが、天子はどうして迎えに来ぬ。〔外末いう〕〔正末いう〕とんだでたらめを言ってくれるものじゃ。

《南呂》【一枝花】抵多少不欽奉皇○(帝)宣、不遵敬將軍令。不由我不背反、不由我不掀騰。兩國巉(攙)爭。難使風雷性。三不歸一滅行。着死圖生。劍斫了差來的使命。

〔校〕○不欽奉……寧本は「个欽奉」に改める。○皇○……鄭・寧本は元曲選本に従って「皇帝」、徐本は「皇命」とする。○不遵敬……寧本は「尊敬」に改める。○巉爭……鄭・寧本は「攙爭」に改める。

〔注〕○抵多少……「まるで～のよう」ということだが、多くの場合逆転して、皮肉な口調で「これはとんだ～だ」という意味になる。「追韓信」（元刊本）第一折【寄生草】「我則見敗殘鱗甲滿天飛、抵多少西風落葉長安道（〔雪をうたって〕目に入るのはこわれた鱗が空いっぱいに飛び、とんだ西風に落ち葉舞う長安の道じゃ）」ほか。ここでは、以下の二句が何を指しているかがよくわからない。隋何を非難したものと取れば、「全く皇帝の言葉も聞かず、将軍の命にも従わぬ奴」ということになろうし、英布自身のことを言っていると取れば、「皇帝の言葉も聞かず、将軍の命にも従わぬというとんでもないことになってしまった」ということになろう。とりあえずここでは前者で訳しておく。なお、元曲選本は「抵多少遵承帝王宣、稟受將軍令」とする。これなら「とんだ～になってしまった」として自分の苦境を述べていることになろう。○「皇○宣、將軍令」……元刊本では、皇帝に関わる単語はしばしば表記することを避けて○で記される。そうした「○○」「○」の事例としては、「聖旨」かと推定されるものとして「薛仁貴」第一折の【點絳唇】の前の白と第二折【三(么)】及び「看錢奴」第四折【鬬鵪鶉】、「皇帝」と推定されるものとしては「薛仁貴」第四折【收江南】、「聖○(旨)」と思われるものとしては「陳摶高臥」第二折【黄鐘煞】がある。おそらく元曲選本のように「皇帝宣」だったのであろう。皇帝の「宣」と将軍の「令」を並称するのは、『史記』「張釋之馮唐列傳」に見える「閫以内者、寡人制之。閫以外者、將軍制之（〔将軍を見送る君主が言うには〕朝廷の中は余が治める。朝廷の外は将軍が治められよ）」に基づいて、「博望燒屯」（内府本）第二折「休悞在朝天子宣、莫違閫外將軍令（朝廷におわす天子の宣旨、朝廷の外をとりしきる将軍の命令にそむくでない）」、趙天錫【雁兒落過清江引碧玉簫】「美河南王」「奉朝中天子宣、領閫外將軍令（朝廷の中なる天子の宣旨を奉じ、朝廷の外とりしきる将軍の命令をつかさどり）」ほかの例がある。○掀騰……元来は、劉時中【一枝花】套「羅帕傳情」の【尾聲】に、「掀騰開舊篋笥（古いタンスの中を引っかき回して）」とあるように、ひっくりかえすといった意味であろうが、転じて「玉壺春」（息機子本）第二折【牧羊關】に「這厮待搠開了俺風月佳期、掀騰了花燭洞房（こいつは私たちの恋の約束突き破り、新婚のねやを滅茶苦茶にする）」というように、大騒ぎを起こすことをも意味する。○巉爭……鄭・寧本は、「奪い取る」ことを意味する「攙」なら意味が通ると見て、「攙爭」に改めるが、この語も用例がない。元曲選本は「吞併」。○風雷性……「風雷」は、「博望燒屯」（元刊本）第一折【混江龍】に「如還我志遂風雷。立起天子九重龍鳳闕、顯俺那將軍八面虎狼威（もしわが風雷の志をとげることができれば、天子の地位を打ち立てて、わが将軍の威風を示してくれよう）」とあるように、元曲では一般に立身出世のことを意味する。その方向で理解するなら、隋何は野心にものいわせることもままならぬゆえ、大胆な振る舞いに及んだということなろう。あるいは激しい気性のことかもしれない。他に用例はないが、似た言葉として「〔儒〕梅香」（古名家本）第二折「（旦兒云）

……倘或我風火性的夫人知道呵（もしうちの気性の激しい母上が知られたら）」いう「風火性」がある。この場合には自分のことをさすことになろう。仮に前者で訳しておく。○三不歸……帰ることができない。またどうなるかわからないこと。敦煌曲「長相思」三曲（作客在江西）の末尾に「此是富不歸」「此是貧不歸」「此是死不歸」とあり、また成化本『白兔記』二十六葉に生（劉知遠）が「我有三不回」として「不得官不回、不富貴不回、我死了不回（官職を手に入れねば帰らない、富貴にならなければ帰らない、死んでしまったら帰らない）」という。「三不歸」の例としては「拜月亭」（元刊本）第二折【一枝花】に「耶（爺）娘三不歸、家國一時亡（お父様お母様は行方もしれず、国はたちまち滅んで）」などがある。○一滅行……でたらめなふるまいか。用例は「調風月」（元刊本）第三折【鬼三台】「俺那厮做事一滅行。這妮子更敢有四星（あいつのすることは「一滅行」だが、このあまっこは更に上手かも）」とこの箇所の二例のみ。○着死圖生……他に例がない。死中に活を求めることか。本劇第一折【那吒令】に、「你待要着死撞活。將功折過。你休那里信口開呵」とあり、ここでは明らかに「死中に活を求める」意味である。なお元曲選本は、この曲の後半が大幅に異なり、この句はない。

〔訳〕全く天子の宣旨をも承らず、将軍の命にも従わぬというやつじゃな。われにもなく裏切りをやらかし、われにもなく謀反騒ぎを起こすはめになったわ。両国が争う中、隋何めは野心にもの言わせることもなりかねるとて、思い切った無茶な振る舞い、死中に活を求め、遣わされてきた使者を斬りおった。

【梁州】不由我實丕ヌ（丕）興劉滅楚、却這般笑吟ヌ（吟）背暗投明。太平只許將軍定。折末提人頭厮摔、噙熱血相噴。折末勢雄ヌ（雄）厮併。威糾ヌ（糾）相持、齊臻ヌ（臻）領將排兵。鬧垓ヌ（垓）虎鬪龍爭。俺也曾濕浸ヌ（浸）臥雪眠霜、圪搽ヌ（搽）登山驀嶺。俺也曾緝林ヌ（林）劫寨偸營。隋何嗜是綰角兒弟兄。漢中王不把咱欽敬。都説他是眞命。似這般我覷重瞳煞輕省。那武藝我手里怎地施呈。

〔校〕なし。

〔注〕○實丕丕……本当に。「救風塵」（古名家本）第一折【醋葫蘆】「那一个不實丕丕拔了短籌（誰もが本当に不幸な運命引き当てる）」。○背暗投明……暗愚な主君を捨て賢明な主君に仕える。「三奪槊」（元刊本）第一折【油葫蘆】「陛下想當日背暗投明歸大唐」（陛下、思えばむかし〔尉遲恭は〕「暗きに背き明るきに投ず」と申しますように大唐王朝に帰服いたしました）。○太平只許將軍定……「太平は将軍だけが定めることができる」という意味だが、対になる句が「不許將軍見太平」、つまり「将軍はその太平を見ることができない」ということであり、そちらに意味の重点がある。『五燈會元』巻八に「太平本是將軍致、不使將軍見太平」、巻十六に「太平本是將軍致、不許將軍見太平」という形で見え、「賺蒯通」（内府本）第一折の蕭何の白では、「功労可許將軍建、不許將軍見太平」というなど、様々なバリエーションで用いられる。○提人頭厮摔、

噙熱血相噴……「金線池」第一折【天下樂】では「漾人頭厮摔、含熱血厮噴」という形で現れる。なお、「噴」は眞文韻だが、ここでは庚青韻と通押しているものと思われる。○眞命……真の天命を受けた皇帝。「陳摶高臥」（元刊本）第一折正末白に「當有眞命治世（真の天命受けた方が世を治められるにちがいない）」とあり、また「博望燒屯」第四折において管通が阿斗の人相を見るところに「眞命科」とあるなど用例は非常に多い。

〔訳〕やむなく本当に劉氏を興し楚を滅ぼそうと、かように喜び勇んで暗きを捨てて明るきに身を投じたものを、太平は将軍にしか定めえぬ（なれど太平の世を将軍には見せてくれぬ）とやら。首をひっさげ投げつけ、生血を口に含んで吹きつけようと、たとえ勇ましく合戦し、堂々と闘うにせよ、ずらりと将兵を整列させ、激しく龍虎相争う激しい戦闘するにせよ、われらとてじとじとと雪に臥し霜に眠り、せっせと山を登り峠を越え、われらとてずらりそろって敵の砦や陣営に夜討ちを掛けたものじゃ。隋何よ、われらは総角結うころからの竹馬の友じゃ。漢中王はわしを敬意をもって迎えぬ。みんなはあれは真の天命受けた皇帝だというが、このように楚の二重瞳をも軽く見るこのわしが、この腕前をわしはどのように披露すればよいのだ。

〔做到寨科〕〔城外屯軍了〕〔等外末云了〕〔《云》〕我則這營門外等者。你則疾出來。

【隔尾】我這里撩衣破歩寧心等。瞑目攢眉側耳聽。我恰待高叫聲隋何〔《云》〕那漢一歩八个謊。〔《唱》〕却也喚不嚶(應)。我則道是有人覷了這動靜。〔《云》〕元來不是人。〔《唱》〕却是這古剌ヌ(剌)風擺動營門前是這繡旗影。

〔校〕○なし。

〔注〕○撩衣破歩……着物をからげ大股で歩く。「追韓信」第四折【収尾】「捰袖揎拳挺魁頂。破歩撩衣扯劍迎（袖をまくり拳をふって頭をもたげ、着物をからげて大股に歩き剣を抜いて迎え撃つ）」。○瞑目攢眉……元曲選本は「瞋目攢眉」とするが、目をつぶり眉をひそめて沈思するさまでよかろう。○一歩八个謊……他に例が見られないが、「一歩進む間に八回嘘をつく」ということであろう。この句を元曲選本は、「恰待高叫聲隋何你那一歩八箇謊的可也喚不應」とし、曲辞の中に組み込んでいる。これはおそらく第三句が通常押韻する七字句であることに合わせるため、韻を踏まない「何」で切らずに、「應」までを一句としたのであろう。句数を合わせるため、元曲選本では、末句の前に「喈則道是有人來供給喈使令」という句を増している。

〔訳〕〔陣地に到着するしぐさ〕〔城外に軍を駐屯させる〕〔外末がいう〕〔正末がいう〕わしは營門の外で待っている。おぬしは早く出てまいれ。

わしはといえば着物をからげ大股に歩みつつ心を鎮めて待とうとし、目を閉じ眉をひそめつつ聞き耳立てる。大声上げて「隋何よ」

と呼ぼうとするが、［入れぜりふ］やつめは一歩ごとに八つの嘘を言う男。［うたう］なんとまあ呼べど答えはありはせぬ。誰かがこの様子を探っているのかと思うたら、［入れぜりふ］なんだ人ではない。［うたう］何とゆらゆらと營門の前で風に揺れる刺繍した旗の影であったわ。

［等外出來了］［做怒云］鸞（鑾）駕那里也。隋何、我知道、自古已來、那里有天子接降將礼來。隋何、一句話、則是你忒説口了些个。［做過去見駕拜、住］［做猛見濯足科］［做氣煩惱意科］［怒唱］

【牧羊關】分明見劉沛公濯雙足、慢自家有四星。却交我撲鄧ヌ（鄧）按不住雷霆。眼睜ヌ（睜）謾打回合、氣撲ヌ（撲）還添意掙。怒從心上起、惡向膽邊生。却不見客如爲客、您做的个輕人還自輕。

〔校〕○なし。

〔注〕○説口……大きなことをいう、ほらを吹く。『西廂記』（弘治本）巻三第一折白「小娘子將簡帖兒去了、不是小生説口、則是一道會親的符籙（あなたが手紙を届けてくれたら、自慢じゃありませんが、それこそ縁組みの御札ってものさ）」ほか。○做氣煩惱意科……たとえば「牆頭馬上」（古名家本）第三折に「尚書做意科」というように、「做意科」というト書きは明代のテキストには多数認められる。おそらく「思い入れのしぐさ」ということであろう。ここでは「氣煩惱」つまり怒りの思い入れをするということか。○有四星……「星」は秤のめもりのこと。めもり四つ分ということから、ひどさの程度が甚だしいことをいう。「調風月」（元刊本）第三折【鬼三台】「俺那厮做事一滅行。這妮子更敢有四星（あいつのやることはでたらめだけど、あのあまっこは更に上手かも）」など。○回合……「回和」に同じか。「對玉梳」（顧曲斎本）第二折【端正好】に「俺愁人病裡如何過。又被這秋景相廻和（私たち愁い抱くものはどのように過ごせばいいものか。またこの秋景色に『廻和』されて）」、同じく【尾聲】に「不曉事的頹人認些回和（やぼなろくでなしめ『回和』をお知りなさい）」とあり、『宋元語言詞典』は「糊塗、迷乱」と釈する。「回合」は元来「包囲される」という意味であり、そこから「（なすすべもなく）ぼんやりする」という意味が生じた可能性はあろうし、「對玉梳」の二つの用例は「ぼんやりさせられて」「自分の間抜けぶりを知りなさい」と解釈は可能である。しかし「黄粱夢」（古名家本）第四折【滾繡毬】の正末が呂洞賓を殺そうとする場面には「斡斡斡禁聲的休回和（さあ黙って『回和』するな）」とあり、この場合は抵抗する、または口答えするといった意味かとも思われる。ここでは仮に前者で訳する。○意掙……元曲選本は「讒掙」とする。「囈掙」に同じ。「燕青博魚」（内府本）第三折【倘秀才】に「我這里呵欠罷翻身、打箇意掙（おれはあくびしてから向きを変え……する）」、「梧桐雨」第一折【油葫蘆】（古名家本）に「我恰待行、打個囈掙（行こうとして、……する）」といった例がある。前者は、燕青が酔い覚ましのためぼんやりしているところに、男女の忍び会いを見つけるくだりで、「ぼんやりする」「はっとする」のどちらにも取りうる。後

者は玄宗が楊貴妃に気づかれないように近づこうとして、鸚鵡に見られたのに気づくところ。「はっとする」の方が適当であろう。おそらく、はっとする、あるいはどうしていいかわからずに呆然となるといった意味であろう。仮に後者で訳しておく。○怒從心上起、悪向膽邊生……頻用される成語。「三戰呂布」（内府本）第三折【醉春風】「惱的我悪向膽邊生，不由我怒從心上起」ほか。○見客如爲客……客をもてなすには客の立場にならねばならぬという意味の成語と思われるが、他に例がない。○輕人還自輕……人を軽んずるのは自らを軽んずること。「調風月」（元刊本）第三折【調笑令】「這厮短命。沒前程。做得个輕人還自輕（こやつはけしからぬろくでなし、人を軽んずるは自らを軽んずるに同じという振る舞いをいたしました）」。

〔訳〕〔外が出てくる。正末怒っていう〕天子の輿はどこだ。隋何よ、わしは知っておるぞ、いにしえより天子が降将を出迎える礼などありはせぬ。隋何よ、ひと言でいうと、おぬしはちとホラが過ぎたのであろう。〔入っていって帝に会い拝するしぐさ〕〔正末が足を洗っているのをふと見るしぐさ〕〔怒る思い入れのしぐさ〕〔怒って唱う〕

劉沛公が両足を洗うさましかと見て取った、わしを侮るにもほどがある。めらめらとこみ上げる怒りは抑え難い。目の前で馬鹿にされながらむざむざむなしくぼんやりするばかり、プンプンしつつも呆然とするのみ。怒りは心からこみ上げ、憎しみははらわたに生ず。「客をもてなすには客の立場にならねばならぬ」というのに、お前は「人を軽んずるものは自らも軽んず」をやらかした。

〔做怒住。出來氣科《云》〕濯足而待賓、我不如你脚上糞草。衆軍聽我將令、則今日便回去。〔等外云了〕〔《云》〕住ヌ（住）、我若見楚王、楚王問我、英布、你降漢家、今日不用你也、你却來。與推轉者。海、這的便好道有家難奔、有國難投。

【哭皇天】誰將我這背（臂）膊來牢扶定。〔外云了〕〔怒放〕待古你是知心好伴等。潑劉三端的是、ヌヌ（端的是）負功臣。既劉沛公無君臣義分。嗏漢隋何嗜有甚麼相知面情。〔帶云〕你把劉邦來奚落、將英布相扶。《唱》這公事其中間都是你的嬖倖。你殺了他生性。你失了他信行。〔帶云〕若不看從來相識、往日班行、這堝兒番了面皮。

〔校〕○背膊……寧本は「臂膊」に改める。○奚落……徐本は「奚落我」とする。○相扶……徐本は「相欺」に改める。○嬖倖……徐・寧本は元曲選本が「弊幸」とするのに従って「弊倖」に改める。

〔注〕○推轉……引っ立てることだが、処刑することまでを含むのが常である。「追韓信」（元刊本）第三折で、正末韓信が軍令を犯した樊噲に対して「衆軍拿下者。既爲元帥、軍有長（常）刑。推轉者（者ども引っ捕らえよ。元帥となったからには、軍には刑罰というものがなくてはならぬ。引っ立てよ）」と言い、「遇上皇」（元刊本）第三折で文書送達の期限に遅れた趙元について「交外推轉了（外〔下役人か〕に引っ立てさせる）」とあるのは、いずれも処刑を前提とした行為である。○有家難奔、有國難投……追いつめ

られて行き場がなくなること。それぞれ個別に、時には他の句と対になって用いられることもあるが、この形で対になるのが基本のようである。「追韓信」（元刊本）第三折【尾】帯白「那時節有家難奔。有國難投。急不得已（〔追いつめられた項羽は〕逃れるに家なく、身を投ずるに国なく、せっぱつまってどうにもなりませぬ）」など。○背膊……このままでは理解しがたい。字形の近似からいっても寧本のように「臂膊」に改めるべきか。○怒放……「放」は元刊本のト書きに特徴的に見える語で、雑劇上演のテクニカルタームであろうと思われるが、意味するところは分からない。具体的には、「介子推」第三折で介林が自刎したのを受けて「做慌放」とあって【上小樓】のうたになる例、同じく第四折で正末が火に焼かれて「慌放」のあと【鬬鵪鶉】のうたになる例、「汗衫記」第三折で正末が「做跪下、放」のあと【快活三】のうたになる例、同じ折で【普天樂】の帯白のあとに「放」としてうたに戻る例、「遇上皇」第一折で、「正末扮醉上」のあとに「便放」とあって【點絳唇】のうたになる例、同じく第二折で「正末扮冒風雪上放」とあって【一枝花】のうたになる例、同じく第三折で「正末便上放」とあって【粉蝶兒】のうたになる例、「博望燒屯」第一折【後庭花】の途中で「做意放」とあってうたが続く例、「魔合羅」第四折【剔銀燈】の途中でセリフややりとりがあった後、「末放」とあってうたに戻る例、「老生兒」第三折で正末が登場し、ト兒のセリフを受けて「做放」とあって【鬬鵪鶉】のうたとなる例、同じく第四折のはじめで「正末引ト兒・外上放」とあって【新水令】のうたとなる例がある。共通して言えるのは、うたが始まる前、もしくは中断しているところで、唱い出しの前に置かれているということである。特に「介子推」の二つ目と「遇上皇」「老生兒」のすべての事例が套数の始まる直前に置かれ、残りの例の大部分が帯白などで曲が中断している箇所に認められることは、音楽に関わる用語である可能性を示唆しているかもしれない。「遇上皇」の最初の例では、正末が登場して「便放」、つまりすぐに「放」というのだから、あるいは音楽が始まること、もしくは唱い出しに関わる何らかの行為かとも思われるが、正確なところは不明である。○待古……「大古」「大故」「特古」などさまざまに表記され、また多く「裏」を伴って用いられる。強い強調であるが、多くの場合「これが本当の～だ」という方向で、実は違うという皮肉な口調になる。「替殺妻」（元刊本）第二折【叨叨令】で不貞な女を殺そうとして、「大古里孟姜女。不殺了要怎麽哥（これはとんだ孟姜女じゃ。殺さずして何とする）」と言うのはその例である。○相知面情……友情。『董西廂』巻六【驀山溪尾】「道咱弟兄面情非薄（我ら兄弟の情は浅からず）」など。○奚落……からかうこと。『董西廂』巻四【鶻打兔】「適來恁地、把人奚落（先ほどはあのように、人のことをからかわれた）」、巻五【甘草子】「休恁厮埋怨、休恁厮奚落（そんなに怨んだりなさいますな、そんなに困らせたりなさいますな）」など。○嬖倖……元曲選本は「弊幸」。悪だくみ、わなを仕掛けて人を陥れること。司馬光「上皇帝疏」に「剗塞弊倖、一新大政（邪悪を除き、まつりごとを一新いたしましょう）」、『宋史』「吳表臣

傳」「嚴和買以絶弊倖（貸し付けを厳格にして、悪だくみを絶った）」など、宋代の政治的な文書には多数用いられている表現であり、表記は嬖倖・嬖幸・弊幸・弊倖のいずれもが用いられるようである。○你殺了～……ここは意味を取りにくい。「生性」が命のことである点からすると、「他」が指すものは劉邦とも考えにくい。仮に指示性がないものと考えて訳す。○番了面皮……馬致遠【耍孩兒】「借馬」の【二】に「不借時惡了弟兄、不借時反了面皮（貸さねば兄弟の仲にひびが入り。貸さねば仲違いすることになる）」というように、「反面皮」とも表記する。仲違いすること。「翻臉」に同じ。

〔訳〕［正末怒る。出てきて怒るしぐさ］足を洗いながら客をもてなすとは、わしはお前の足についた雑草にも及ばぬか。ものどもよく聴け、今日のうちに戻るぞ。［外がいう］［正末がいう］待て待て。わしが楚王にあわば、楚王はこう聴くだろう。「英布、お前は漢に降ったからには、今日ではお前はお払い箱なのに、やって来るとは。引っ立てい」と。ああ、これぞまさしく「帰るに家なく、逃れるに国なし」というものじゃ。（うたう）

誰がわしの腕をつかむのじゃ。［外がいう］［怒る］おぬしはまったくいいお友達じゃて。ろくでなしの劉の三男坊めは、まことにまことに功ある家臣をないがしろにしおる。劉沛公に君臣の義がない以上は、チェッ、漢の隋何よ、わしらの間に友情などありはせぬ。［いれぜりふ］お主は劉邦をコケにして、この英布を助けるだって。（うたう）これはすべておぬしの仕組んだことじゃ。おぬしは命を奪い、信用を失わせたのだぞ。［いれぜりふ］もし昔の仲間のよしみがなければ、おぬしとはこれまでのところだ。

【烏夜啼】敢交你這漢隋何這答兒里償了俺那天臣命。漢中王見面不如聞名。分明見把自家倩。交你做了人情。交我□浦滕。覷楚江上(山)似火上弄冬凌。漢乾坤如碗内拿蒸餅。你也不言語、不答應。却不但行好事、莫問前程。

〔校〕○倩……鄭本は「清」、徐本は「請」、寧本は「輕」に改める。○交我□浦滕……鄭本は「交我□□浦滕」、徐本は「交我氣撲滕」、寧本は「交我枉了撲滕」とする。なお元曲選本は、「分明」以下この部分までが全く異なる。○江上……鄭・徐・寧本は元曲選本に従って「江山」に改める。

〔注〕○見面不如聞名……蔣防「霍小玉傳」に「玉乃低鬟微笑細語曰、見面不如聞名、才子豈能無貌（小玉は頭を垂れて微笑すると小声で言った。「顔を見るのは名を聞くのに如かずとやら。才子には美貌がなくてはかないませぬ」）」とあり、また『景德傳燈録』巻十四など、仏教関係の文献にも多く見える。当時よく知られた成語であったらしい。○自家倩……よくわからない。「倩」が他の字の誤りであることは間違いないものと思われるが、どの字に当てるかについては見解が分かれる。寧本のように「輕」とすれば「私を軽んじる」として意味は取りやすいが、音が一致せず、字形も大きく異なる。鄭本の「清」は、字形が近いが意味を取りに

くい。徐本の「請」は、崩した字形なら「倩」に近く、意味も通らないことはないので、ここでは「請」として訳す。○交我□浦滕……この句も不明である。後の三文字は全体にはっきり見えない。仮に徐本に従って訳す。なお、元刊本において判読困難な箇所が元曲選本では全く違う文言になっていることは注意される。○火上弄冬凌……火の上で氷をいじくる。たちまち消え失せるということ。「調風月」（元刊本）第三折【小桃紅】「旦(但)交我一權爲政。情取火上等(弄)冬凌（もし私におまかせになったりなさったら、絶対に火の上の氷、縁談はぶちこわしですよ）」。○碗内拿蒸餅……碗に入った蒸餅を取る。容易に料理できるということ。「硃砂擔」（内府本）第一折【賺煞尾】には「他覷我似火上弄冬凌、覷我似碗裏拏蒸餅（奴は私を火の上で氷をいじくるようにたちまち始末できるものと見なし、碗の中の蒸餅を取るように簡単に始末できるものと見る）」と、ここと同様「火上弄冬凌」と対にして用いた例がある。○但行好事、莫問前程……「趙清獻公（抃）座右銘」（『説郛』巻七十三下「善誘文」）に見える。また『続修詩話總龜』巻二「達理門」に「青箱雜記」を引いて、「世傳馮瀛王詩有曰……但知行好事、莫要問前程」と、馮道の詩と称するものに類似の句が見える。

〔訳〕漢の隋何よ、お前にここで楚王の使者の命を償ってもらおうか。漢中王は会うのと聞くので大違い。はっきりとわしを招いておいて、おぬしにわしを抱き込ませ、わしを怒らせおる（？）。楚の天下を火の上の氷のようにはかないもの、漢の天下をお椀の中の蒸しパンのように簡単に取れるものと見ておるな。おぬし、うんともすんともいわぬな。善行のみを積んで、先のことを思いわずらうなというやつじゃな。

［等外云了］［做氣怒科《云》］四十萬大軍聽者、我也不歸漢、也不歸楚、一發驪山内落草爲賊。隋何、我説與你。我若反呵、抵一千个覇王便算。［做氣不忿科］

【收尾】不爭漢中王這一遍無行逕(徑)。單注着劉天下爭十年不太平。心中焦意下頴。氣如虹汗似傾。劉家邦怎要清。劉家邦至不寧。怨隋何枉保奏、自催殘自急竟。幾番待共這説我的隋何不干淨。［等外末云了］［打喝］［唱］你那里噤聲くく(噤聲)。誰待將恁那沒道礼(理)的君王他那聖○(旨)來等。［下］

［校］○曲牌……徐本は「黄鍾尾」に改める。なお、元曲選本は前の【烏夜啼】とこの曲の間に、【罵玉郎】【感皇恩】【採茶歌】の三つの曲牌がある。○意下頴……徐本は「意下憎」に改める。○枉保奏……徐本は「枉奏請」に改める。○自急竟……徐・寧本は「自爭競」に改める。○打喝唱……鄭本は「打唱」、徐本は「正末打喝」とする。○你那里噤聲噤聲……徐本は帯白とする。○道禮……鄭・徐・寧本は「道理」に改める。○聖○……徐本は元曲選本に従って「聖明」、鄭・寧本は「聖旨」とする。

［注］○便算……鄭本は未詳とする。一千人の覇王に計算できるという意味であろう。○單注……運命に定められている。「西蜀夢」

（元刊本）第二折【梁州】「單注着東吳國一員驍將。扨折俺西蜀家兩條金梁」（東呉の一人の勇將が、我ら西蜀の二人の黄金の大黒柱を切ってしまう定め）」。○意下頴……意味が分からない。徐本は「意下憎」に改めるが、特に根拠は示されていない。○氣如虹……通常は意気高らかなこと。李賀「高軒過」「馬蹄隠耳聲隆隆、入門下馬氣如虹（馬蹄の音も高らかに耳にかまびすしく、門に入って馬を下りれば意気は虹のよう）」。○催殘……「摧殘」に同じ。ひどい目に遭う。○急竟……この語も他に例がなく、よくわからない。あるいは字形の類似から見て徐・寧本のいうように「争競」の誤りか。ここでは仮にその方向で訳す。なお、元曲選本は「心中」からここまでが全く異なる。やはり意味を取りにくい箇所が全面的に異なる点は注意される。

〔訳〕［外末がいう］［正末が怒るしぐさ。いう］四十万のものども、聴け。わしは漢にも降らぬ、楚にも降らぬ。いっそこのまま驪山へ行って山賊となろうぞ。隋何よ、いっておくぞ。わしがもし反旗を翻せば、覇王の千人分に匹敵しようぞ。［激怒するしぐさ］いかんせん漢中王がこのたび無道な振る舞いしたばかりに、劉の天下は十年争いが続き太平訪れぬ定めとなった。心はあせり気はいらいらと（？）、心高ぶり汗はどっとあふれる。劉家の天下はどうして静かでいられよう、劉家の天下は至って不穏。恨めしいのは隋何があたらわしを推挙したこと、自らを損ない、自ら争うこととなった（これも自業自得）（？）。わしを説得しに来おった隋何と争おうと何度も思うが。［外がいう］［正末怒鳴る］［うたう］黙れ、黙れ。おぬしの無道な君王の宣旨などだれが待つものか。

《第三折》

［正末上、怒云］休動樂者。英布、你自尋下這不快活來受。

【端正好】鎮淮南、無征鬪。倒大來散袒（誕）優遊。信隋何説謊謾人口。待把富貴奪功名就。

〔校〕○散袒優遊……鄭・徐・寧本は元曲選本に従って「散誕優遊」とする。○謾人口……徐・寧本は元曲選本に従って「謾天口」に改める。

〔注〕○このくだり、元曲選本では隋何が四人の旦（妓女）を連れて登場する。○倒大來……なんとも。全く。「任風子」（元刊本）第三折正末白「若不是師父點覺了沙、倒大來快活（もしお師匠様の教えを受けていなければ全く愉快にしていたものを）」、「介子推」（元刊本）第三折正末白「半載之間。倒大來悠哉（〔致仕してからというもの〕この半年間、まことにゆったりとしたもの）」、「七里灘」第一折【青哥兒】「倒大來免慮忘憂（〔隠遁生活は〕全く心配もなく〔出世するよりよい〕）」ほか。「倒」は「到」とも表記され、「大小」の合音ともいわれるが、これらの用例から見ると多少「かえって」といった語感をも含むようである。○散誕優悠……のんびりと悠々と暮らす。「竹葉舟」（元刊本）第二折【新水令】「喚靈童採瑞草、同仙子上瀛洲。散袒優悠。嘆塵世幾昏晝（霊童呼んで何と争おうと何度も思うが。［外がいう］［正末怒鳴る］［うたう］

めでたき草を摘み、仙女とともに瀛洲に上る。のんびりゆったり、俗世に日夜の過ぎゆくのを嘆ずるばかり)」、同第三折【哭皇天】「趁煙波漁父、散袒優悠(もやたつ波を追う漁師は、のんびりゆったり)」ほか。○謾人口……元曲選本は「謾天口」とし、徐本・寧本はこれに従う。「牆頭馬上」(古名家本)第四折【滿庭芳】に「他那里談天口噴珠玉。者也之乎(あの人は、天を語る口から珠玉あふれて、難しい言葉並べるなどということがあるものですか)」という「談天口」という語があり、また「謾天地」といった言い回しが頻用されることから改めたのであろう。しかし「謾人口」でも意味は通じよう。「謾人」は、『朱子語類』巻八十六に「只是做箇新様好話謾人(目新しい面白い話をこしらえて人を騙しているだけだ)」とあるように、人を欺く、あるいは人を馬鹿にするといった意味でよく用いられる語である。

〔訳〕「正末が登場して、怒っていう」嘩子方やめい。英布よ、おまえ自分でこの不運を招いたな。
淮南を鎮め、戦さもなく、なんとものんきなものであったのに、隋何の人を欺くでたらめを信じて、富貴を手に入れ手柄を立てようとしてしまった。

【滾繡毬】折末恁皓齒謳。錦臂韝(韝)。列兩行翠裙紅袖。製造下百味珍羞。顯的我越出醜。好呵我元來則爲口。待古里不曾喫酒肉。您送的我荒ヌ(荒)有國難投。恁便做下那肉麺山也壓不下我心頭火、造下那酒食海也充(洗)不了我臉上羞。須有日報冤讐。

〔校〕○錦臂韝……鄭・徐本は「錦臂韝」、寧本「錦臂韝」とする。なお、元曲選本は「錦瑟搊」である。○充不了……鄭・寧本は元曲選本に従って「洗不了」、徐本は「冲不了」に改める。○須有日報冤讐……元曲選本は「怎做的楚國亡囚」とする。

〔注〕○皓齒謳……陳基「次韻趙君季文贈杜寛吹觱篥吟」(顧瑛編『草堂雅集』巻一)に「勸君不用皓齒謳。側耳聽此消百憂(白い歯の美女のうたなど聴きたもうな。この篳篥に耳を傾けるだけであまたの愁いを消せるものを)」。○錦臂韝……錦の腕抜き。通常は鄭・徐本のように「錦臂韝」と表記する。『新唐書』巻二十三「儀衛志」に儀仗兵の服装を記した中に「紅錦臂韝」と見える。この例のように、元来は矢を射る際に袖を押さえ、また鷹狩りで鷹をとめるための籠手として多く武人が用いたが、杜甫「卽事」に「百寶裝腰帶、真珠絡臂韝。笑時花近眼、舞罷錦纏頭(あまたの宝石帯に飾り、真珠を腕抜きにまつわらせる。笑えば花が目に近づくよう、舞いおえて錦のかずきを頂戴する)」とあるように、舞姫の装飾としても用いられたようである。○翠裙紅袖……この二語がセットで用いられた例としては、元の許楨の「瑞蓮歌次可行叔韻」に「翠裙紅袖相牽連(みどりのスカートとくれないの袖がつらなる)」があるが、色の組み合わせを逆にした例は、早く宋の王安中の【玉樓春】に「泥金小字回文句、翠袖紅裙今在否(泥金の小さい字で回文を記す。みどりの袖にくれないのスカートの人いまいずこ)」と見える。元曲では「范張雞黍」(元刊本)第一折【么】に「赤金白銀。翠袖紅裙(金と銀に、みどりの袖とくれないのスカート)」と見え、また「金童玉女」(古名家本)第三折【尾聲】「拜

辭了翠裙紅袖簇、朱唇皓齒扶（群れなすみどりのスカートとくれないの袖、酔った身を支えてくれる朱い唇と白い歯に別れを告げ）」と、「皓齒」と併用した例がある。○百味珍羞……ご馳走のこと。早く蕭子良の『淨住子淨行法門』「善友勸奬門十九」に「若見百味珍羞連几重案（あまたのご馳走、机を連ねているのを見れば）」と見える。○爲口……隋何の「口車」のためと、「食べ物のため」をかけた双関語。○肉麺山酒食海……早く曹植「與呉季重書」に「願舉泰山以爲肉、傾東海以爲酒（願わくば泰山を持ち上げて肉とし、東海を傾けて酒としたいもの）」と見える。『水滸伝』（容與堂本）第八十二回「雖無炮龍烹鳳、端的是肉山酒海（龍や鳳凰の料理こそないものの、まことに肉の山に酒の海）」。○臉上羞……不面目。元雑劇では頻用される定型表現。「霍光鬼諫」（元刊本）第三折【滾綉毬】「獻妹妹遮不了臉上羞（妹を献上するとは、この顔の恥隠しきれぬわ）」。金線池（古名家本）第二折【一枝花】「東洋海洗不盡臉上羞。西華山遮不了身邊醜（東海の水でもこの顔の恥は洗い落とせぬ、西華山でもこの身の醜態隠しきれぬ）」。

〔訳〕たとえおぬしが白い歯で歌い、錦の籠手を着けた、きれいどころを両側に並べ、あまたの珍味佳肴をこしらえたとて、いよいよわしの恥をさらすばかり。ええい、わしがこうなったのももとをただせば口のせい、その口もまっこと酒や肉とて食らわぬうちに、おぬしのせいであわてふためき「国はあれども身を投じがたし」というていたらく。おぬしがたとえ肉や小麦粉の山を作ろうと、わしの怒りの火はおさえられぬ、たとえ酒食の海を作ろうと、わしの恥はすすぎきれぬ。いつかきっとこの落とし前はつけてやるぞ。

〔等外把盞科〕〔做不吃酒科〕

【倘秀才】既共俺參辰卯酉。誰吃恁這閑茶浪酒。你一个燒棧道的先生忒絶後。你當日施謀略、運機疇（籌）。煞有。

〔校〕○運機疇……鄭・徐・寧本は元曲選本に従って「運機籌」と改める。

〔注〕○外……元曲選本ではここで張良が曹參・周勃・樊噲とともに登場して酒を勧めることになっている。ここでいう「外」は張良であろう（他の三人が登場するかどうかは定かではない）。○參辰卯酉……「參辰」は二十八宿に属する星の名。參星は西、辰星（房星の別名）は東に位置する。「卯酉」は十二支のうち、方位にすればそれぞれ真東と真西にあたるもの。つまり敵対することをいう。『西廂記』（弘治本）巻四第二折【絡絲娘】「不爭和張解元參辰卯酉（困ったことに張さまと敵同士になってしまったら）」ほか。「參辰日月」という言い方もある。○閑茶浪酒……つまらないお茶とろくでもない酒。多くぶらぶらと遊興を続ける意味で用いられる。「汗衫記」（元刊本）第二折【青山口】「你浪酒閑茶。臥柳眠花（おまえはのらくらして女遊びに耽り）」、『西廂記』（弘治本）巻三第三折【折桂令】「恁的般受怕擔驚、又不圖甚浪酒閑茶（こんな恐い思いをするのも、何もくだらない酒や茶をたかろうとしてではない）」ほか。○燒棧道的先生……『史記』巻五十五「留侯世家」に「良因説漢王曰、『王何不燒絶所過棧道、示天下無還心、以

固項王意』。乃使良還。行、燒絶棧道（張良はその機会に漢王に言った。「通った桟道を焼いて、天下に帰る意思がないことを示して、項王を安心させてはいかがです」。そこで、張良を韓に帰らせ、出発すると、桟道を焼き捨てた）」とあり、『兩漢開國中興傳誌』などの小説では張良が劉邦に無断で桟道を焼いたことになっている。なお「先生」は、「任風子」（元刊本）第三折の正末が道士になって登場する場面で、ト書きに「正末挑擔扮先生上（正末が天秤棒を担いで「先生」に扮して登場）」とあるように、道士に対する呼称である。張良・諸葛亮などの軍師は、魔法使をイメージされて、道士と見なされるのが常である。○絶後……「空前絶後」つまり「すごいものだ」ということと「退路を断つ」ということを掛け、更に「跡取りなし」という罵語を背後に隠しているのではないかと思われる。「すごい」の例としては、「獨角牛」第四折【川撥棹】「賣弄他能拽直拳。快使横拳。你比俺劉千絶後光前（奴はストレートも達者なら、フックも速く、この劉千とは段違いと大自慢）」、「跡取りなし」の例としては、「楚昭王」第二折【鬼三台】「四口兒都遭機勾。幾輩兒君王絶後（家族四人がみなわなにかかれば、何代か続いた王家が断絶）」などがある。

〔訳〕［外（張良？）が杯を手に取るしぐさ］［（正末）飲まないしぐさ］

われらとは仇敵の間柄となったからには、おぬしらのこのろくでもない茶や酒などだれが口にしよう。棧道を焼いた道士どの、あんたは空前絶後のすごいお人（ろくでなし）じゃな。あの時には、謀略にはかりごと、全く大したものであったわ。

［等子房云臣僚了］［《云》］丞相、你説漢朝有好將軍、好宰相、有誰、你説。［等子房云王陵了］［《云》］王陵比我會沽酒。［等又云周勃了］［《云》］周勃比我會吹簫送殯。［等又云隋何了］［《云》］您漢朝子一个好隋何。［等隋何云了］［《云》］他隋何祖上是燕國上大夫。他家里會鑽秤。［《等子房云樊噲了》］［《云》］您子一个好樊噲。［等子房云了］

〔校〕○等子房云樊噲了……鄭・徐・寧本はこのト書きを補う。

〔注〕○王陵比我會沽酒……王陵は漢建国の功臣。敦煌變文「漢將王陵變文」などで知られる。彼が酒屋であったという記述は史書には見えないが、失われた『前漢書平話』の内容を伝えるものと思われる『兩漢開國中興傳誌』巻一には、「（呂后の父呂叔平が劉邦に会って）大喜曰、此乃大貴之人。遂邀季入店飲酒。……店主王陵亦與同席（大喜びして言うには、「これはとても偉くなる人じゃ」。そこで劉季〔劉邦〕を誘って店に入り、酒を飲んだ。……店の亭主の王陵も同席した）」とあり、白話文学の世界では王陵は酒屋の主人であったとされていたようである。○周勃比我會吹簫送殯……同じく前漢建国の功臣周勃が葬式の笛吹だったことは、『史記』巻五十七「絳侯周勃世家」に、「絳侯周勃者、沛人也。……勃以織薄曲爲生、常爲人吹簫給喪事、材官引彊（絳侯周勃は、沛の出身である。勃は織物で生計を立てて、いつも葬式の時には簫を吹いていた。弩兵でもあった）」と明記されている。○鑽秤…

…未詳。元曲には他に用例がない。ごまかしや駆け引きのことか。前に「燕国上大夫」とあることとの関連も不明。なおこの後に、当然張良が樊噲に言及するべきである。諸本に従い、ト書きを補っておく。

〔訳〕［張良が家臣たちのことをいう］［正末がいう］丞相、お主は漢朝には良き將軍、良き宰相がいるといわれるが、どなたがおられるのかな。お話しくだされ。［張良が王陵のことをいう］［正末がいう］王陵はわしより酒を売るのが上手だな。［張良が周勃のことをいう］［正末がいう］周勃はわしより簫を吹いて葬式をするのが上手だな。［張良が隋何のことをいう］［正末がいう］あんたたち漢朝のけっこうな隋何さんかい。［隋何がいう］［正末がいう］あの隋何の祖先は燕國の上大夫。先祖伝来ごまかしはお手の物じゃ（？）。［張良が樊噲のことをいう］［正末がいう］けっこうな樊噲さんかい。［張良がいう］

【滾繡毬】一个樊噲封做萬戸侯。他比我會殺狗。托賴着帝王親舊。統領着百萬貔貅。和我不故友。枉插手。他怎肯去漢王行保奏。我料來子房公子你傖頭。一池綠水渾都占、却怎不放傍人下釣鈎。不許根求。

〔校〕なし。

〔注〕○樊噲～殺狗……樊噲が犬殺しであったことについては、『史記』巻九十五「樊酈滕灌列傳」に「舞陽侯樊噲者、沛人也。以屠狗爲事、與高祖俱隱（舞陽侯樊噲は沛の出身である。犬の屠殺をなりわいとし、高祖劉邦とともに身を隠した）」とある。○貔貅……伝説中の猛獣。強い兵隊のこと。梁武帝「移京邑檄」の「總率貔貅、驍勇百萬（猛き兵を率い、勇士は百万）」など、文言文でよく用いられ、元曲でも頻用される。○挿手……二通りの解釈が考えられる。一つ目は、『朱子語類』巻三十六に「毎國有世臣把住了。如何容外人來做。如魯有三桓、齊有田氏、晉有六卿、比比皆然。如何容聖人挿手（どの国にも代々の重臣がいて権力を握っていて、無関係な人間をどうして政治に参加させたりしよう。魯の三桓、齊の田氏、晉の六卿、みなそうなのだ。どうして聖人に手出しする余地があろうか）」というように、手出しすることとする見方。もう一つは、「七里灘」（元刊本）第四折【滴滴金】に「俺那裏猿猱會插手」というように、拱手すること、つまり叉手と同じと取る見方。この場合には「頼んでも無駄だ」ということになる。ここでは仮に前者に従って訳す。○傖頭……「傖」は元来、六朝期に頻用された北方人に対する蔑称である。『晉書』「文苑傳」に、陸機が左思を嘲笑した語を引いて、「此間有傖父欲作三都賦。須其成當以覆酒甕（ここに北の田舎親父で「三都賦」を作ろうとしている者がいるが、できあがったら酒がめの蓋にかぶせるのに役立つだけだろう）」というのはその例である。ただし、時代が下がると一般的な罵言になって、必ずしも北方人に対してのみ用いられるわけではないようである。ここでのニュアンスは定かではないが、北方人という意識があるとすれば、元代当時北方出身者が権力を独占していたことに対する皮肉の意図があるのかもしれない。

○一池緑水渾都占……成語のようであるが、出典はわからない。「獨角牛」第三折【端正好】「把一池緑水可也渾都占、可怎生不放俺這傍人僣（池中の緑の水を独り占め、どうして我々他の人間を入れてくれないのか［？］）。○不放傍人下釣鈎……他人に手出しさせないこと。無名氏【鬬鵪鶉】「元宵」の【紫花兒序】に「向紅裙中插手。錦被里舒頭。風流。不許傍人下釣鈎（紅いスカートの中に手を差し込み、錦の布団の中で首を伸ばし、粋にかけては、他の人間が釣り糸を垂らすのを許さない）」とあり、やはり成語のようである。○根求……この形で用いられる例はないが、「跟求」に同じであろう。

〔訳〕樊噲というやつが萬戸侯に封ぜられたが、やつはわしよりも犬殺しが上手じゃ。帝王の昔なじみなのを頼りに、百万の勇士を率いるまでになりおった。わしとは古なじみでもないくせにしゃしゃり出て来おっても無駄なこと、やつが漢王のところでわしに味方してくれたりするはずもない。考えてみれば子房どのよ、お主ら北方のやつらは、池をまるごと独り占め、どうして他の人間には釣針おろさせず、ほしいものを求めることを認めないのだ。

［等外云了］［《云》］丞相這般説、我來降漢、我須沒歹意。您濯足而待賓、我不如您脚上糞草。［《等外云了》］［《云》］是天子從小里得來的證候。

〔校〕○糞草……この句の後に、鄭・寧本は「等子房云了」を補う。

〔注〕○證候……病気。「霍光鬼諫」第三折【滚繡毬】「我來的那日頭。染證候。都子爲辱家門禽獸（わしが帰ってきたあの日に病気になったのは、みな家門に泥を塗るけだものめのせいじゃ）」ほか。○「脚上糞草」の後には、劉邦の病気を説明するセリフがあった方が都合がよい。元曲選本では隋何のセリフとなっているが、鄭・寧本は張良のセリフがあるものとする。

〔訳〕［外がいう］［正末がいう］丞相がそういわれるが、わしが漢に降ろうとしたのには、悪意などまったくない。おぬしらは足を洗いながら客をもてなすなど、わしはおぬしらの足についた雑草にも及ばぬということだ。［外がいう（？）］［正末がいう］天子の幼い頃からの持病だと。

【脱布衫】那時節豐沛縣里草履團頭。早晨間露水里尋牛。驪山驛監夫歩走。拖狗皮醉眠石臼。

〔校〕なし。

〔注〕○團頭……各業種ごとのギルド（団・行）の長。ただし、一般の人々から蔑視される職種に限って用いられる。例えば、『古今小説』第二十七巻「金玉奴棒打薄情郎」に「如今且説杭州城中一個團頭、姓金、名老大。……那金老大有志氣、把這團頭讓與族人金癩子做了、自己見成受用、不與這夥丐戸歪纏（さて、杭州城中に一人の団頭がおりました。姓は金、名は老大です。……この金老大は志のある男で、団頭の職を一族の金癩子に譲って、自分は手持ちの財産を楽しみ、乞食たちと付き合いません）」とあるのは乞食の頭の例であり、また『水滸伝』（容與堂本）第二十五回に登

場する何九叔は、死体処理係の長である。一方、蘇轍「論雇河夫不便劄子」に「團頭倍之、甲頭火長之類增三分之一（団頭はその倍、甲頭・火長の類は三分の一増し）」とあるのは、いわゆる地保、つまり徭役の一環として任命される地回りの役人のことをいうようである。劉邦の亭長という肩書きからすれば、こちらの方がふさわしいかもしれない。○驪山驛監夫歩走、拖狗皮醉眠石臼……『史記』巻八「高祖本紀」「高祖以亭長爲縣送徒驪山、徒多道亡。自度比至皆亡之、止飲、夜乃解縱所送徒。……高祖醉曰、『壯士行、何畏』。乃前、拔劒擊斬蛇。蛇遂分爲兩、徑開。行數里、醉、因臥（高祖は、県の仕事として亭長の身分で驪山まで囚人を護送して行くことになったが、道中大勢の囚人が逃亡してしまった。着く頃にはみんな逃亡してしまっているだろうと考えて、旅をやめて酒を飲むと、夜になって護送していた囚人をみんな釈放してしまった。……〔前に大蛇がいると聞いて〕高祖は酔って言った。『壯士が道を行くのに、何をこわがる』。そのまま進んで行って、剣を抜いて蛇を斬ると、蛇はそのまま両断されてしまった。道が開けたので、数里行ったが、酔っていたので、そのまま横になってしまった）」とある。『兩漢開國中興傳誌』などの内容も基本的に大きな違いはなく、「石臼」云々という記述は見られない。○拖狗皮……恥知らず。「殺狗勸夫」（脈望館抄本）第三折【牧羊關（実際には二つ目の【牧羊關】ゆえ【么篇】にあたる）】「是个啜狗尾的喬男女、是一个拖狗皮的窮後生（ろくでなしのたわけた野郎と、恥知らずの貧乏小僧）」など。

〔訳〕あの頃は豊沛縣の草履ばきの親分で、朝露踏んで牛を追い、驪山駅まで人夫を見張ってかち歩き、その途中で恥知らずに酔い潰れて石臼に寝込んでいたくせに。

【小梁州】那時節偏沒這般淹證候。陡恁的納諫如流。輕賢傲士慢諸侯。無勤厚。惱犯我如潑水怎生收。

〔校〕○淹證候……徐・寧本は元曲選本に従って「腌證候」とする。

〔注〕○淹證候……元曲選本は「腌證候」とする。「腌」は「ろくでもない」といった意味で、二音節化すると「腌臜」となる。この語は、『董西廂』巻五【刮地風】に「自家這一場腌臜病、病得來蹺蹊（私のとんだろくでもない病、症状が不可解で）」とあるように、よく病と結び付けられる。ただし、「三奪槊」（元刊本）第二折【牧羊關】に「這些淹潛病、都是俺業上遭（このろくでもない病はみなわが宿業のなせるもの）」とあるように、「腌臜」は「淹潛」とも表記される。しかもこの曲では、他に第二句と末句にも水と関わる単語が用いられており、全体を水の縁語で構成しようとする意図が見える点から考えて、「淹」のままにする方が妥当であろう。○陡恁的……「急にこのように」、またそこから転じて「まことに」という意味にもなるようである。前者の例が『董西廂』巻六【倬倬戚】「陡恁地精神偏出跳。轉添嬌。渾不似舊時了（どうしてにわかにむやみと美しくなり、いよいよ色気も増して、前とはまるで変わってしまったのか）」、後者の例が「漢宮秋」（古名家本）第二折【鬬蝦蟆】の「陡恁地千軍易得、一將難求（まこと千

軍は得やすきも一将は求めがたしとやら)」。ただし後者も、「急にこんなざまになってしまった」というニュアンスは含まれているようである。○納諫如流……諫言をよく聴き入れる。「追韓信」(元刊本)第三折白「我王錯矣。豁達大度、納諫如流(陛下は間違っておられます。陛下は度量広く、諫めを聞き入れられ)」、「霍光鬼諫」第三折【三煞】「豁達大度。海量寛洪、納諫如流(心広く、度量も広く、諫めをお聞き入れください)」とあるように、多く「海量寛洪」または「闊達大度」と合わせて用いられ、また「楚昭王」(元刊本)第二折【紫花兒序】「秦莊公却甚納諫如流(秦の荘公は、諫言をよく聞き入れるなどとんでもない)」のように反語でもよく用いられる。この場合前後のつながりを取りにくいが、皮肉なニュアンスで用いているのであろう。○勤厚……ていねいなこと。この折の【么】に「見他忙勸酒。施勤厚」とあり、また「西蜀夢」第四折【滾繡毬】に「更怕俺不知你那勤厚(あなたのていねいなことをしらぬはずとてありませぬ)」とある。○潑水怎生收……覆水盆に返らず。「楚昭王」(元刊本)第二折【鬼三台】「子怕一家兒潑水難收(一家そろって一巻の終わりになるのではないかと気遣われる)」、「魔合羅」(元刊本)第四折【柳青娘】「却不你千悔萬悔。是潑水在地怎收拾(ひどく後悔しておろうが、覆水盆に返らず、手の施しようもないわ)」ほか。

〔訳〕あの頃はこんなろくでもない持病はまったくなかったのに、急に全く人の意見もどんどん聞き流してしまうようになられましたな。優れた人物を馬鹿にし諸侯を侮り、ていねいなところもない。わしは怒りで「覆水盆に帰らず」という気持ちじゃ。

〔《云》〕我不認得恁劉沛公、放二四、拖狗皮、是不回席。〔《駕上》〕

〔《云》〕兀的不羞殺微臣。〔等駕做住、把盞了〕

〔校〕○是不回席……徐本は「世不回席」、寧本は「誓不回席」に改める。○「不回席」と「兀的不羞殺微臣」の間に、一字分ほどの空格がある。鄭本は「駕上」、寧本は「等駕上云了」をここに補っている。元曲選本では、漢王が登場して英布に「九江王、破楚大元帥」の位を与える勅を読み上げる。

〔注〕○放二四……やりたい放題。「四」は「肆」と通用するので、おそらく「放肆」を「放四」と表記し、語呂をよくするために「二」を加えたのであろう。『董西廂』巻一【整金冠】「放二四不拘束、儘人團剝(したい放題とらわれることとてなく、言いたい奴には言わせておくまでのこと)」。○是不回席……「回席」はお礼の宴席を設けることであろう。徐本の校記は元人『丸經』巻上「承式章」に「靴皮臉、拖狗皮、輸便怒、贏便喜、吃別人、不回禮(靴の皮のような面の皮のろくでなし、負ければ怒り、勝てば喜び、人にご馳走になって、お返しもしない)」とあるのを引いて、「拖狗皮、不回席」を「当時の俚語」とする。「是」は通常「世」または「誓」と書かれる強調の副詞であろうが、表記が必ずしも安定しない以上、「是」を無理に改める必要はないであろう。

〔訳〕〔正末いう〕わしは劉沛公など知らん。わがまま勝手なろくでなしの食い逃げ野郎が。〔帝登場〕〔正末いう〕それがしはもう

恥じ入るばかりでございます。［帝しぐさ。杯をとる］

【唱（么）】被聖恩威攝（懾）的忙饒後。見笑吟ヌ（吟）滿捧着金甌。見他忙勸酒。施勤厚。［《云》］怎生見天子待花白一會來。却又無言語了。［《唱》］哎無知禽獸。英布你如鑞槍頭。

〔校〕○唱……原本は曲牌名同様白抜きで「唱」。鄭・徐・寧本は、【么篇】とする元曲選本に従い、「么」に改める。○威攝……鄭・徐・寧本は「威懾」に改める。なお元曲選本は、「喈則道遣紅粧來進這黄封酒」と、この句自体が全く異なる。○饒後……寧本は「繞後」に改める。

〔注〕○唱……このト書きが白抜きで記される例は、他にもあるが珍しい（「云」の方はかなり例が多い。これは「唱」が記されること自体例が少ないためである）。しかもここでは曲牌の初めにあたり、曲牌名がわりに記されているように見える。これは、この曲が前の【小梁州】の【么篇】、つまり同じ曲牌の二度目の使用にあたるためであろう。【么篇】について曲牌名を付さない例は他にもあるが、これはおそらく元来詞同様に二回同じメロディを繰り返す形式が用いられていたことの名残であろう。事実『董西廂』ではすべての曲牌が二度繰り返して用いられている。【唱】はここから二度目が始まることを示す標識としての役割を担っているのかもしれない。○威攝……「攝」は諸本が改めるように「懾」の誤りであろうが、「攝」と書かれることもあるようである。何煌によって「王粲登樓」（古名家本）に書き込まれた李開先抄本に基づく校は、第一折【么篇】「書嚇南蠻。威鎮諸藩」を「威攝諸侯」と改める。○饒後……他に用例がない。後に下がることか。なお、この句も元曲選本は全く異なる。○花白……叱責する、罵倒する。「七里灘」（元刊本）第四折【折桂令】に「我把您上下君臣。非是嚴光。把您花向（白）（わしはおぬしら上下の君臣を、この厳光が、おぬしらをけなそうというのではない）」、鍾嗣成【一枝花】「自序醜齋」の【烏夜啼】に「自花白寸心不昧。若説謊上帝應知」（みずからけなすは良心に恥ずることなく、嘘をつけば神さまごぞんじ）」といった例がある。○鑞槍頭……真鍮の槍先。見かけ倒し、役立たず。『西廂記』（弘治本）巻四第二折【小桃紅】「呸你是箇銀様鑞槍頭（ペッ、とんだ見かけ倒しの役立たずだわ）」ほか。

〔訳〕天子さまのご恩に圧倒され、あわてて後ずさり。見ればにこにこと笑みを浮かべて杯になみなみとついだ酒を捧げ持ち、しきりに酒を勧められて、こまめな気配り怠りない。［正末いう］どうしたことか、天子さまに会ったらこっぴどくやりこめてやろうと思っていたのに何もいえなくなってしまった。［うたう］ああ、ばかな畜生の英布め、お前は見かけ倒しの役立たずじゃ。

［等駕跪着把盞科］［做接了盞兒荒科］［背云］後代人知、漢中王幾年幾月幾日、在館驛内跪着英布吃了一盞酒、便死呵也死的着也。

［拜唱］

〔校〕○荒科……鄭・徐・寧本は「慌科」に改める。

〔注〕○このせりふは元曲選本とほぼ一致する。

〔訳〕〔天子がひざまずいて杯をとるしぐさ〕〔正末が杯を受け取ってあわてるしぐさ〕〔正末傍白〕漢中王は何年何月何日、駅舎の中で英布にひざまづき、一杯酒を勧めたと、後々の人が知ったなら、たとえ死んでも本望というものだ。〔拝礼して唱う〕

【叨叨令】請你一个漢中王龍椅上端然受。早來子房公半句兒無虚繆(謬)。光祿司幾替兒分着前後。教坊司一派簫韶奏。英布你早到快活也末哥、ヌヌヌヌヌ（你早到快活也末哥）、這般受用誰能勾。

〔校〕○虚繆……鄭・徐・寧本は、元曲選本に従って「虚謬」に改める。○光祿司……徐・寧本は元曲選本に従って「光祿寺」に改める。

〔注〕○光祿司……宮中の飲食を司どる役所。徐・寧本は「光祿寺」に改めるが、『元史』巻七「世祖四」に「改宣徽院爲光祿司（宣徽院を改めて光祿司とした）」とあるように、元代の名称は光祿司であり、『明史』巻七十四「職官志三」にあるように、名称変更を伴いつつ明の洪武三十年までこの状態が続いたようである。従って改める必要はない。「單刀會」（元刊本）第三折【柳青娘】「教光祿司准瓊將(漿)。他那珍羞百味□□□。□□□金盃玉觴（光祿司に玉の飲み物用意させ、あまたの珍味佳肴を……。金の杯玉のさかずき……）」。○替兒……量詞。現代語の「起」や「批」にあたり、組みになった人数や往復の回数などを数えるのに用いる。『西遊記雑劇』第三出「（丹霞禪師上云）……長江後浪催前浪、一替新人換舊人（長江の後の波は前の波をせき立て、一群の新人、旧人に代わる）」。○簫韶……舜の音楽の名。『尚書』「益稷」「簫韶九成、鳳皇來儀（簫韶を九度奏すれば、鳳凰はあいさつに訪れる）」。絶えなる音色の音楽の代表として用いられる。「梧桐雨」（古名家本）第一折【混江龍】「順風聽、一派簫韶令（風に乗って聞こえるは、簫韶の調べ）」。

〔訳〕どうか漢中王たるあなたさまには御座にきちんとお座りになり、この杯をお受けください。先ほどの張良殿の言葉にはいささかのいつわりもございませなんだ。光祿司は入れ替わり立ち替わり前後に分かれてご馳走を運び、教坊司は雅楽を奏でております。英布よ、おまえはもううれしくて仕方がない、おまえはもううれしくて仕方がない。こんなよい目にあう者が他におろうか。

【剔銀燈】舌剌ヌ(剌)言十妄九。村棒ヌ(棒)的呼么喝六。查沙着打死麒麟手。這的半合兒敢慢駡諸侯。就里則是个大村叟。龍椅上把身軀不收。

〔校〕○查沙……鄭本は「揸沙」に改める。○龍椅上把身軀不收……元曲選本は「須不共英雄輩做敵頭」とする。

〔注〕○村棒棒……野暮なさま。「薛仁貴」（元刊本）第三折【么】「全不似昨來、村村棒棒、叫天吖地（前の田舎臭く、大騒ぎするのとは大違い）」ほか。○呼么喝六……「么」はさいころの一。「么六」は二つのさいころで一と六がそろうこと。博打でさいころを振って、一の六のと騒ぐことから転じて、大騒ぎをすることになる。「麗春堂」（古名家本）第二折【鬬鵪鶉】に「則承想喝六呼么

（六の一のと騒ぐことばかり考えて）」とあるのは、実際の博打における事例。○査沙……おしひろげる。無名氏【耍孩兒】「拘刷行院」「査沙着一對生薑手（一対の生姜のような手をおしひろげ）」。○打死麒麟手……「秋胡戲妻」（元曲選本）第一折【上馬嬌】に「則見他惡噷噷輪着粗桑棍。這厮每哏。端的便打殺瑞麒麟（見ればたけだけしく太い桑の棍棒振り回す。こやつらの乱暴さときたら、全くめでたい麒麟を殴り殺さんばかり）」とあり、「飛刀對箭」（内府本）第四折の【掛玉鈎】でも「索强似您打麒麟的黄桑棍（〔前に父が「黄桑棍」でぶんなぐってやると言っていたことを受けて、下賜された玉の杖は〕あなたがたの麒麟を打ち殺す黄桑棍よりずっといいでしょう）」、また「對玉梳」（顧曲斎本）第一折【油葫蘆】でも「常則是惡哏哏緊搭着條黄桑棍。端的待打殺臥麒麟（〔おっかさんは〕いつも猛々しく黄桑棍をしっかと握って、まことに横たわる麒麟を打ち殺さんばかり）」とあり、常に「桑棍」とセットで用いられていることから考えて、「黄桑棍打殺臥麒麟」といった成語があったものと思われる。立派なものを無体に殴ることか。○半合兒……現代語の「一會兒」同様、「しばらく」「たちまち」といった意味で用いられる。「燕青博魚」（内府本）第四折【離亭宴歇指煞】「半合兒歇息在牛王廟、一直兒走到梁山泊（しばし牛王廟で休息し、まっしぐらに梁山泊へとかけつける）」など。

〔訳〕ペラペラしゃべる十のうち九はでたらめ、田舎者丸出しでがやがやと大声上げ、麒麟をも打ち殺さんばかりの手をばっと開き、ひとしきり諸侯を口汚く罵る。中身はただの田舎おやじ、玉座には収まりきらぬご様子じゃ。

【蔓精（菁）菜】捋袒開龍袍叩（扣）。依法次坐着那豐沛縣里麥場頭。

〔校〕○【蔓精菜】……鄭・徐・寧本は「蔓菁菜」に改める。元曲選本も同じ。○龍袍叩……鄭・徐・寧本は「龍袍扣」に改める。元曲選本は「披袍袖」とする。

〔注〕○この曲は元曲選本とは大幅に異なる。曲譜本来は「7・6乙。7・6乙。4。7。5。」の七句構成のはずだが、五句しかなく、脱落があるものと思われる。元曲選本が大幅に異なるのは、このことと関係しよう。脱落のためか、意味を取りにくい。○麥場……麦打ち場。「薛仁貴」（元刊本）第三折【快活三】に「俺兩个曾麥場上俏（捎？）了谷（穀）穗（おれたち二人は麦打ち場で穂を拾った〔？〕仲じゃないか）」というように、農村の象徴のように用いられる。○録軸……脱穀に使う石のローラー。「薛仁貴」（元刊本）第三折【耍孩兒】「你記得共我摸班（斑）鳩爭上樹、夸（跨）六軸比高低（おれと一緒に鳩を捕まえようと争って木に登ったり、ローラーに乗って背比べをしたりしたのを覚えているだろう）」。先の「麦場」に置かれているもので、やはり農村の象徴。○沒哏和……「無添和」に同じ。真実で偽りのないこと。「酷寒亭」（古名家本）第三折【梁州】に「麪米相停無添和、壓盡玉液金波（麹も米も本物で混ぜものなく、金の波立たせる玉の液も目ではない）」とあるのは本来の意味、蘭楚芳【粉蝶兒】「贈妓」の【一煞】に「我

這般厮敬重偏心願、只除是無添和知音的子弟、能主張敬思的官員（私のように大切にしてひたすら願うのは、偽りのない相手の気持ちのよく分かる遊び人と、考えのある粋なお役人だけ）」とあるのは、派生した意味であろう。

〔訳〕（漢王は）胸元はだけて龍袍のボタンはずし、家来たちは序列通りにすわっているが、そのさまは豐沛縣の麦打ち場にて、ローラー引いていたのと同じ（？）。立ち居振る舞い粋ではないが、心の中は偽りがなくまことに度量の大きいお方。

【柳青娘】早是君王帶酒。休驚御莫聞奏。子房公免憂。看英布統戈矛。今番不是誇强口。楚項藉（籍）天喪宇宙。漢中王合覇軍州。此番絶、今後了、這回休。

〔校〕項藉……鄭・徐・寧本は「項籍」に改める。なお元曲選本は「楚重瞳」とする。

〔注〕○驚御……皇帝を驚かせること。早く『宋書』「百官志上」に「章帝元和中侍中郭舉與後宮通、抜佩刀驚御（後漢の章帝の元和年間、侍中の郭舉が後宮の女性と通じ、佩刀を抜いて帝を驚かせたことがあった）」と見え、『宣和遺事』前集に「高俅喝曰、匹夫怎敢驚御（高俅が怒鳴りつけて申すには、「下郎めが陛下を驚かすとはいい度胸だ」）」などと小説でも頻用される。○宇宙・軍州……この二語をセットで用いた例としては、「馬陵道」（元曲選本）第二折【滾繡毬】「這江山和宇宙。士女共軍州。都待着俺邦情受（この天下と世界、男女も軍州も、すべてわが国のものとしようと思うたに）」がある。なお、「軍」は宋代の行政単位だが、「軍州」という言い方は固定表現化して宋代以降も用いられる。

〔訳〕はや陛下は酒に酔われたようじゃから、陛下を驚かせるでないぞ、奏上するでないぞ。張子房どのご心配無用、この英布が軍を統べるのを見られるがよい。この度は強がりをいうのではない。楚の項籍は天がその国を滅ぼし、漢中王は軍州に覇を称えることになろう。この度できっぱり、今後はおしまい、今回で終わりとしようぞ。

【道和】把軍收。ヌヌヌ（把軍收）。江山安穩揔屬劉。不剛求。看咱ヌヌ（看咱）恩臨厚。交咱ヌヌ（交咱）難消受。終身答報志難酬。恨無由。直殺的喪荒坵（丘）。遙觀着征騁驟。都交他望風走。看者ヌヌ（看者）咱征鬪。您毎ヌヌ（您毎）休來救。看者ヌヌ（看者）咱征鬪。都交死在咱家手。荒郊野外横尸首。直殺的馬頭前急留古魯ヌヌ（魯魯魯）亂衮（滾）死〃〃〃（死死死）死人頭。

〔校〕○急留古魯ヌヌヌ……元曲選本は単に「急留古魯」とする。鄭本は「急留古魯魯魯魯」、徐・寧本は「急留古魯急留古魯」とする。○亂滾死〃〃〃……元曲選本は「亂滾滾死死死」とする。鄭本は「亂滾死死死死」、徐・寧本は「亂滾死死」とする。

〔注〕○収軍……軍を引くことだが、「飛刀對箭」楔子で摩利支がとなえる語に「得勝旗搖、收軍望封官賜賞（勝利の旗を揺らし、軍を引いて官位と褒美を待ち望む）」とあるように、通常凱旋する時に用いられる。○剛求……無理に求めること。關漢卿【鬪鵪鶉】

「女校尉」【秦兒令】「得自由。莫剛求（気ままにして、無理には求めず）」、馬致遠【四塊玉】「嘆世」「佐國心、拿雲手。命里無時莫剛求（国のために働く心、雲をつかまんとする手、運命の定めなければ無理に求めてはならぬ）」。○喪荒坵……「救風塵」（古名家本）第二折【醋葫蘆】に「他道是殘生早晚喪荒丘（いずれは荒れ果てた塚に命果てる身といって）」とあり、他に「喪荒郊」という例も多くある。定型表現となっているようである。

〔訳〕凱旋し、凱旋し、天下は安らかにすべて劉氏のもの。無理にこちらから求めたわけではないが、見よ、見よ陛下のご恩は大層厚く、なんとも、なんとも身に余る思い。一生かけて恩に報いようにも実現はしきれまい。恩に報いる手だてもないのは無念なこと、荒野で命失わせるまで戦ってくれよう。はるかかなたから戦馬が疾駆するのを見れば、敵はその気配に風をくらって逃げ失せよう。見よ、見よ、我が戦いぶりを、おぬしら、おぬしらの助けは無用じゃ。見よ、見よ、我が戦いぶりを、敵はみな我が手にかかって死ぬことになろう。荒れ果てた野辺には死体が打ち捨てられ、合戦の果てに馬の前にはごろごろと死人の首が転がることになろう。

【隨煞】免了媿（魏）豹憂。報了濉水讐。殺的塞斷中原江河溜。早子不從今已後。兩分家國指鴻溝。［下］

〔校〕○隨煞……徐本は元曲選本に従って「啄木兒尾」とする。○媿豹……鄭・徐・寧本は「魏豹」に改める。元曲選本は「彭越」とする。

〔注〕○魏豹……魏王豹。魏王豹は漢に背いて楚に降り、その後また捕らえられて漢に降り、ともに滎陽を守っていた漢将周苛に疑われて殺された。普通であれば「魏豹の心配事を取り除いてやる」、つまり味方の魏豹を窮地から救うという意味になり、不自然に感じられる。元曲選本が「彭越」に改めているのはそのためであろう。「魏豹という憂いの種を除く」とも取れないことはないが、通常の「免～憂」の用法から見ると不自然である。ただ、『兩漢開國中興傳誌』では魏豹は濉水の戦いで劉邦側の将軍として戦ったことになっており、次の「濉水の仇を報いる」という句とセットで考えれば、魏豹を救うという意味でよいのではあるまいか。○兩分家國指鴻溝……元明期に初等教育書として広く用いられていた胡曾『詠史詩』の「鴻溝」に「虎倦龍疲白刃秋。兩分天下指鴻溝（白刃の秋に虎は倦み龍も疲れ、双方で鴻溝を境界と指して天下を二分した）」とあるのに基づこう。

〔訳〕魏豹の憂いの種を取り除き。濉水の仇に報いよう。中原の河の流れも塞ぎとめんばかりの勢いで戦えば、もはや「これより後は、鴻溝を境に国を二つに分ける」こともあるまいぞ。［退場］

《第四折》

［正末<上>拿砌末扮探子上］

〔校〕○本折は元曲選本のほか、『盛世新聲』（盛本）・『詞林摘艶』巻九（無名氏「氣英布雜劇」と題す。詞本）・『雍熙樂府』巻一（「覇王戰英布」と題す。雍本）にも収められる。詳しくは後の校勘表を参照。本文の校記では特に必要な場合のみ記す。○正末上……「上」を鄭・徐・寧本は削る。

〔注〕○砌末……小道具のこと。たとえば「介子推」（元刊本）第二折のト書きに［扮閹官托砌末上（宦官に扮し、砌末を捧げて登場）］とあり、そのあとの白に「自家六宮大使王安。奉官裏聖旨・皇后聖旨、賚三般朝典、將東宮太子賜死（私は六宮大使の王安です。天子様のご命令と、皇后様のご命令を奉じて、三種の朝典を持って、東宮太子様に自殺を命じにまいります）」という点から見れば、ここでいう「砌末」は「三般朝典」、つまり弓弦・薬酒・短刀である。元曲選本には「執旗打搶背科（旗を持ちとんぼを打って登場）」とある。これに従えば、「砌末」は旗であることになる。○探子……斥候のこと。第四折では、正末は探子に改扮（役柄を変えること）するわけだが、このような事例は、他に「飛刀對箭」「單鞭奪槊」「老君堂」などにも認められ、戦闘描写を行う上で一つの定型となっているものと思われる。本劇の元曲選本も含め、いずれも探子のうたによる報告と、それを受ける主将による説唱調の白との掛け合いというスタイルを取る。おそらく後者は、異種芸能に由来するものであり、こうした掛け合いのスタイルの芸能が存在して、それが雑劇の一部として取り込まれているのであろう。ここでは掛け合いの存在が明示されていないが、おそらくは元曲選本同様張良、もしくは劉邦との掛け合いの形式を取っているものと推定される。

〔訳〕正末が小道具を手にし、斥候に扮して登場。

《黄鐘》【醉花陰】楚漢爭鋒竟（競）寰宇。楚項藉（籍）難嬴（贏）敢輸。此一陣不尋俗。英布誰如。據慷慨甚推擧。

〔校〕○竟……鄭・徐・寧本は盛本・詞本・雍本・元曲選本に従って「競」に改める。○楚項藉難嬴敢輸……鄭・徐・寧本は「楚項籍難贏敢輸」に改める。詞本・盛本は「楚項籍誰贏敗輸」、雍本は「楚項籍難贏敗輸」。元曲選本は「那楚覇王肯甘心伏輸」とする。○元曲選本は二句多い。注参照。

〔注〕○【醉花陰】は通常七句からなるが、末二句が次の【喜遷鶯】の最初に来る例がしばしばあり、鄭騫『北曲新譜』はこれを「古体」、通常のスタイルをを「近体」と呼んでいる。ここでは「古体」によっていることになる。盛本・詞本・雍本・元曲選本は「近体」（こちらの例の方が圧倒的に多い）にあわせて、【喜遷鶯】の初二句を【醉花蔭】の末尾に移動している。○不尋俗……並々のものではない。「薛仁貴」（元刊本）第一折【醉扶歸】「薛仁貴箭發無偏曲。手段不尋俗（薛仁貴の矢は百発百中、腕前は並々ならず）」。「不俗」だけでも同様の意味になることがある。○慷慨……きっぷ、男ぶり。特に武将などの豊かな能力を示す時によく用いられる。「薛仁貴」第一折【混江龍】「你子説慷慨將軍八面威、聖明天子百靈扶（堂々たる将軍は威厳にあふれ、ご聡明なる天子はあまたの霊の助けありと申すが）」ほか。

〔訳〕楚と漢がしのぎを削り天下を争うが、楚の項籍が勝つのは難しく恐らく負けよう。この一戦は尋常ならず、英布に誰がかなおうか。げにもますらおぶりは推挙に値する。

【喜遷鶯】多應敢會兵書。沒半霎兒〔《云》〕嗏出馬來。〔《唱》〕熬番楚霸主。他那壁古剌ヌ(剌)門旗開處。楚重瞳陣上高呼。無徒。殺人可恕。情理難容相欺負。厮耻辱。他道我看伊不輕、我負你何辜。

〔校〕○嗏出馬來……原本は小字。鄭本は前に〔帶云〕を補って帯白(入れぜりふ)とし、徐本・寧本は「嗏」のみ襯字と見なす。寧本は、盛本・詞本・雍本・元曲選本にならって「多應敢會兵書。沒半霎兒嗏出馬來熬翻楚霸主」の二句を【喜遷鶯】の末尾に移す。【醉花蔭】の注を参照。○番……鄭・徐・寧本は元曲選本に従い「翻」に改める。盛本・詞本・雍本は「番」である。

〔注〕○無徒……ごろつき。『董西廂』巻七【古輪臺】「被那無徒漢、把夫妻拆散(あの悪党めに、夫婦の中を引き裂かれた)」、「博望燒屯」(元刊本)第二折【梁州】「叵耐無徒領士卒。怎敢單搦這耕夫(けしからぬごろつきめが士卒を率い、この百姓と勝負しようとはいい度胸だ)」ほか。○殺人可恕、情理難容……殺人は許せても、道理からいって認められない。要するに勘弁ならないという時に用いる。「豫讓呑炭」(古名家本)第四折【耍孩兒】「未出語心先痛。殺人可恕、情理難容(言葉に出す前に心は痛む。殺人は許せても、道理からいえば認められぬ)」。「無禮難容」となることもある。『張協狀元』第二十七出「(丑白)作怪、作怪、殺人可恕、無禮難容(けしからん、けしからん、殺人は許せても無礼は許せぬ)」。この場合は婿入りを断ったことを言い、「殺人」云々は枕詞的についているにすぎない。『五燈會元』巻十六にも「殺人可恕、無禮難容」の形で見えており、あるいはこちらの方が古い言い方なのかもしれない。○相欺負。厮耻辱……「相欺負」は後の「厮耻辱」と対になっている点からすれば、「こけにして、恥をかかせおったな」と項羽のせりふにも読めるが、仮に「厮耻辱」は状況を説明する正末の語として解釈する。○他道我看伊不輕、我負你何辜……両句とも項羽の語とすれば、「かれはいいます『自分はお前を粗末に扱わなかった、お前に何の悪いことをしたのだ』と」となるが、ここは前者が項羽、後者が英布の語として訳しておく。

〔訳〕さだめし兵術にもたけていよう。いくばくもなく(いう)さあ馬を出して、(唱う)楚の覇王を苦しめるはず。あちらではさっと門の旗が開くと、楚の二重瞳は陣頭で高らかに呼ばわる。「人でなしめ、人殺しは赦しても、無礼は赦せぬ。こけにしおって」。たがいに罵りあう。やつ(項羽)が「わしはお前を粗末には扱わなかったはず」といえば、こちらは「裏切って何が悪いか」と答える。

【出隊子】嗜這壁先鋒前部。會支分能對付。床ヌ(床)ヌ(床)響颼ヌ(颼)陣上發金錣(鏃)。沙ヌ(沙)ヌ(沙)齊臻ヌ(臻)披(坡)前排士卒。牙僕剌ヌ(剌)的垓心里驟戰駒。

〔校〕○嗜這壁先鋒前部。會支分能對付……この二句を元曲選本は

「俺這裏先鋒前部。會支分能對付」とするのに対し、盛本・詞本・雍本は「俺這里先鋒（雍本のみ「逢」）英布。會支分能擺布」となっている。また次句の「響颼ヌ」も、他のテキストが「冷颼颼（または「搜搜」）」とするのに対し、元曲選本のみが「響颼颼」とする。つまり、元曲選本のみが元刊本に一致することになり、臧懋循は何らかの元刊本に近い本文を持つテキストを参照していた可能性が想定できる。○床床床……徐・寧本は盛本・詞本・雍本・元曲選本に従い「咻咻咻」に改める。○金錣……鄭・徐・寧本は元曲選本に従って「金鏃」に改める。○沙沙沙……徐・寧本は「唦唦唦」に改める。なお盛本・詞本・雍本・元曲選本はすべて「火火火」とする。○披前……鄭・徐・寧本は「坡前」に改める。なお盛本・詞本・雍本・元曲選本はすべて「軍前」とする。○牙……底本は「呀」、徐・寧本は盛本・詞本・雍本・元曲選本に従って「呀呀呀」に改める。○僕刺刺……徐・寧本「撲刺刺」に改める。なお、盛本・詞本・雍本は「不刺刺」、元曲選本はこの語なし。

〔注〕○支分・對付……「支分」は配下への指図、「對付」は相手への対応をいう。「調風月」（元刊本）第一折【那吒令】「使的人。無淹潤。百般支分（使われる方は、何のやさしさもなく、あれこれ言いつけられる）」、「魔合羅」（元刊本）第一折【天下樂】「百忙的麻鞋斷了蔴。難行、窮對付（あわてていると靴のひもが切れてしまった。歩けないので、応急の手当てをする）」など。

〔訳〕われら先鋒のさきがけ部隊は、味方の指図・敵のあしらいぬかりはない。シュッ、シュッ、シュッと矢鳴りを立てて陣営から矢を放ち、ササッと坂の前にずらり兵士を整列させ、それ、戦場の中心めがけてパカパカと戦馬を駆る。

【刮地風】蹇ヌ（蹇）不待的三聲凱戰鼓。火火古剌ヌ（剌）兩面旗舒。脱ヌ（脱）僕剌ヌ（剌）二馬相交處。喊振天隅。我子見一來一去。不當不覩。兩疋馬、兩个人、有如星注。使火尖鎗的楚項羽。是他便刺胸脯。

〔校〕○蹇蹇……徐・寧本は盛本・詞本・雍本・元曲選本に従って「蹇蹇蹇」に改める。○凱戰鼓……徐本は盛本・詞本に従って「索戰鼓」に改める。○火火……徐・寧本は「火火火」に改める。なお、他のテキストにはこの二字はない。○脱脱……徐・寧本は「脱脱脱」に改める。この二字も他のテキストにはない。○僕刺刺……徐・寧本は「撲刺刺」に改める。盛本・詞本・雍本は「登時間」と全く異なり、元曲選本は「撲騰騰」と、やはり元曲選本のみ元刊本に近い（「刺刺」が変わっているのは、「撲刺刺」が前の曲にもあったため重複を避けて改めた可能性が高い）。○不當不覩……徐本は「不當不堵」に改める。盛本・詞本・雍本・元曲選本はすべて「不見贏輸」とする。

〔注〕○凱戰鼓……「凱」は太鼓を打つ意。「襄陽會」（内府本）第四折【新水令】「旗搖籠日色、鼓凱撼空蒼（旗を振れば日の色を包み込まんばかり、陣太鼓を打てば蒼天を揺るがさんばかり）」、「小尉遲」（元曲選本）第二折【柳青娘】「到來日撲蹇蹇的征鼙慢凱（明日になればドンドンと陣太鼓を緩やかに打ち）」など。○不當不覩

……「當堵」「堵當」で防ぐ、阻止するという意味。『董西廂』巻二【牆頭花】「一時間怎堵當、從來固濟得牢（とっさの間にいかに防ぐべき、以前より作りは堅固）」。「馮玉蘭」（第二折）【呆骨朶】「到如今急煎煎怎當堵（今となっては、大あわてでどう防いだらよいものやら）」。おそらくここは、「當堵」と同じ単語を「當覩」と表記して、「不～不…」という形で強調しているのであろう。ただし「覩」を見るととって、「相手を眼中に置かない」と取れないこともない。○火尖鎗……「單鞭奪槊」（古名家本）楔子の尉遲敬德の白に「您若不信、將我這火尖槍、深烏馬、水磨鞭、衣袍鎧甲、您先將的去、權爲信物（もし信じられぬとあれば、わしの火尖槍、深烏馬、水磨鞭とひたたれによろいかぶとを持って行って、人質代わりにせい）」。

〔訳〕ドンドンと陣太鼓が三回鳴りも果てぬに、ヒラヒラハタハタと二枚の旗が開き、ダッダッパカパカと二頭の馬が駆け違えば、叫び声は天の果てまでとどろく。見れば行ったり来たりさえぎりようもなく、二頭の馬、二人の人、星の流れるが如し。火尖槍を使う楚の項羽が、まず胸元を突く。

【四門子】九江王那些兒英雄處。火出（尖）《鎗》輕ヌ（輕）早放過去。兩員將各自尋門路。動彪軀△輪巨毒。虛里着實、ヌ（實）里着虛。厮過謾各自依法度。虛里着實、ヌ（實）里着虛。呵連天喊擧。

〔校〕○火出……鄭本は「火尖鎗」、徐・寧本は「火尖槍」に改める。盛本・詞本・雍本・元曲選本はすべて「見鎗來」。○動彪軀……徐本は「踊彪軀」に改める。盛本・詞本・雍本・元曲選本はすべて「整彪軀」。○輪……徐・寧本は「掄」に改める。盛本・詞本・雍本は「統」、元曲選は「輪」、つまりここでも元刊本と元曲選本だけが一致していることになる。

〔注〕○尋門路……方法を探すこと。「馮玉蘭」第二折【呆骨朶】「好着我無處箇尋門路（本当に行く道もないこととなった）」。○巨毒……武器。「後庭花」（古名家本）第二折【尾煞】「我見他手搭着巨毒。把我這三思臺揝住（やつが手に武器を持って、おれの頭をひっつかまえ）」。○過謾……だますこと。「過瞞」「過漫」とも表記する。杜仁傑【耍孩兒】「喩情」【一】「開花仙藏擫過瞞得你（花の仙人は魔法を使ってお前をだますことができる）」。『劉知遠諸宮調』巻一【尾】「三娘子背着庄院。把嫂〃過漫（三娘は家を出て、義姉をだまし）」。

〔訳〕これぞ九江王のあっぱれ英雄ぶり、はやくも火尖槍を軽々とかわした。二人の将軍はおのおの手立を探らんと、巨体を動かし、武器を振り回す。虛々実々のかけひき、互いに兵法にのっとり相手を欺こうと、虛々実々のかけひき、わっと雄叫びは天までとどろく。

【山（水）仙子】分（粉）ヌ（粉）ヌ（粉）＜ヌ＞濺土雨。靄ヌ（靄）黑氣黃雲遮太虛。滕（騰）ヌ（騰）馬蕩動征塵、隱ヌ（隱）《隱》人盤在殺霧。吁ヌ（吁）《吁》馬和人都氣出。道吉丁ヌ（丁）火鎗和斧篦罩着身軀。道足呂ヌ（呂）忽斧迎鎗數番煙焰擧。道坑察ヌ（察）着鎗和斧萬道霞

光注。道厮郎ヌ(郎)ヌ(郎)呀斷凱(鎧)甲落兜鍪。

〔校〕○山仙子……鄭・徐・寧本は「水仙子」に改める。盛本・詞本・雍本・元曲選本はすべて【古水仙子】。○分分分……鄭・徐・寧本は「紛紛紛」に改める。諸本も同じ。○ヌヌヌ……鄭・徐・寧本は「ヌ」を一つ衍字と見て削る。○靄ヌ……鄭・徐・寧本は「靄靄」とする。諸本も同じ。○滕ヌ……鄭・徐・寧本「騰騰騰」に改める。盛本・詞本・雍本は「不剌剌」、元曲選本は「刷刷刷」。○隱ヌ……鄭・徐・寧本「隱隱隱」とする。盛本・詞本は「隱隱」、雍本・元曲選本は「隱隱隱」。○吁ヌ……鄭・徐・寧本は「吁吁吁」とする。盛本・詞本はこの句なし。雍本・元曲選本は「吁吁吁」。○都氣出……徐本は盛本・詞本・雍本・元曲選本に従って「都氣促」に改め、寧本は「都氣粗」とする。○道吉丁ヌ……以下の四つの「道」は、盛本・詞本・雍本・元曲選本にはすべてない。○坑察ヌ……徐本は「圪擦擦」に改める。盛本・詞本・雍本は「扢搽搽」、元曲選本は「可擦擦」。○厮郎ヌヌ牙……鄭・寧本は「厮郎郎呀」、徐本は「厮琅琅呀」とする。盛本・詞本・雍本は「厮瑯瑯」、元曲選本は「厮琅琅」。○凱甲……徐・寧本は元曲選本に従って「鎧甲」に改める。盛本・詞本・雍本は「凱甲」。

〔注〕○殺霧……戦場に立ちこめる霧。「博望燒屯」(内府本)第二折正末白「靄靄征雲籠宇宙、騰騰殺霧罩征旗(たちこめる戦雲世界をおおい、立ち上る殺霧は軍旗をつつむ)」。○氣出……他のテキストは「氣促」とし、徐本はそれに従う。その方が息が続かないさまをよく形容しているように思えるが、「氣出」でも「疲れて息を吐き出す」ということで意味は通じるので、無理に改める必要はないであろう。○道……前述の通り、この部分は斥候と主将の掛け合い形式を取っていたものと思われ、事実元曲選本では張良とのかけあいである。ここで元刊本のみ「道(いう)」という語が毎句に付くのは、その形式の名残である可能性がある。○斷鎧……同時代人である元淮「歴渉」詩に「截髪搓繩穿斷甲、征旗作帯勒金瘡(髪を切ってひもによって切れた鎧の札をつなぎ、軍旗を包帯として傷を縛る)」とある。「三奪槊」の注で述べたように、この句は当時よく知られていたものであり、しかも元淮は「三奪槊」を見ていたらしい。「三奪槊」と本劇の作者とされる尚仲賢が同じ地域で勤務していた点からすれば、接触があった可能性もある。この語も元淮の詩と何らかの関係を持つものかもしれない。

〔訳〕もうもうと土の雨が注ぎ、暗々と黒い気と黄色い雲が天を覆う。ドッドッと馬が駆ければ戦塵舞い、もやもやと人は戦いの霧の中を渦巻き、フーフーと馬も人も息を切らす。申し上げます、カチッと火尖槍と斧が舞わされて体を覆うよう。申し上げます、ズルッパッと斧は槍を受けて幾度も火煙を挙げました。申し上げます、カチャッと槍と斧はぶつかって万筋の光流れ。申し上げます、シュルルと鎧が断たれ兜が落ちました。

【収尾】把那坐下征駌(駌)猛兜住。嗔忿ヌ(忿)氣夯破胸脯。生搭損那柄黄烘ヌ(烘)簸箕來大金蘸斧。

[趕霸王出][駕封王了]

〔校〕○【収尾】……他の諸本は【尾聲】とする。○駃……鄭・徐・寧本は「駃」に改める。盛本・詞本は「騵」、雍本と元曲選本は「駃」。

〔注〕○氣夯破胸脯……怒りに胸も張り裂けんばかり。定型表現。『西廂記』（弘治本）巻五第四折【折桂令】「有口難言、氣夯破胸脯（口はあってもものは言えず、怒りに胸も張り裂けんばかり）」「調風月」（元刊本）第四折【得勝令】「氣夯破胸脯。交燕く（燕）兩下里（裏）沒是處（怒りに胸も張り裂けんばかり、燕燕〔主人公の名〕はどちらにもどうすることもできませぬ）」ほか。○簸箕來大……箕ほどもある大きさ。大きなことをいう。『董西廂』巻一【尾】「寫着簸箕來大六箇渾金字（箕ほどもある六つの金の字が書いてある）」ほか。ここで英布の斧が折れて項羽を取り逃がすのかもしれない。○出……元刊本では他に「周公攝政」「介子推」で「祭出」（前者は豊饒を祈る祭祀を行い、後者は焼死した介子推の霊を祀る）、「東窗事犯」で「斷出了」（秦檜の魂を地蔵王が裁き、岳飛の魂を救済する）、「遇上皇」には「駕斷出」（徽宗が判決を下す）、「博望燒屯」に「拿曹操出」「駕斷出」（曹操を捕らえて劉備が裁く）という例が、いずれも劇の末尾にある。全例がすべての曲を唱いおわった後である点が注意されよう（ただし「周公攝政」のみ、套数の終わり、次の注でふれる「散場」かと思われる曲の前にも「斷出」とある。しかしこの場合は、幕切れが二度あるわけであるから、やはり劇の末尾と考えることができよう）。おそらく幕切れに何らかの儀礼的な所作を行ない、あるいは登場人物を送り出すのかもしれない。

〔訳〕かの乗りし戦馬を急に止めれば、プンプンと怒りに胸も裂けんばかり。あたら金色に輝く箕ほどもある大斧を駄目にしてしまった。

〔覇王を追いたてて出〕〔天子が王に封じる〕

【散場】

〔注〕○元曲選本ではここで正末が再び英布に扮して登場し、【側磚兒】【竹枝兒】で勝利のうたを唱い、漢王から淮南王に封じられて、【水仙子】で感謝のうたを唱って終わることになっている。この体例は「倩女離魂」にもあり、やはり【水仙子】で終わる。また元刊本のうち「東窗事犯」「單刀會」「周公攝政」「貶夜郎」は套数が終わった後に韻の異なる曲が数曲置かれている。こうした事実から考えて、元曲選本のこれらの曲は臧懋循が恣意的に付け加えたものではなく、彼が依拠したテキストに存在したものと思われる。元刊本のうち末尾に「散場」と記すものとしては、「氣英布」以外に「拜月亭」「薛仁貴」「介子推」「霍光鬼諫」「竹葉舟」「博望燒屯」の六種があり、更に「汗衫記」は「出場」と記す。おそらくそれらは末尾にこうした結びの場面を置いていたことも示すものと思われる。

題目　張子房附耳妬隋何
正名　漢高皇濯足氣英布

【注】

○張子房附耳妬隋何……「張良が耳打ちして隋何を嫉妬させる」の意であるが、元曲選本にはこうしたくだりはない。元刊本のどこかで演じられていたが、正末に関わらないため明示されていないのであろう。

本研究は、平成十七年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究B）「中国近世戯曲の基礎的研究」の成果の一部である。

（二〇〇五年九月二六日受理）

（1）（あかまつ　のりひこ　京都大学大学院人間環境学研究科助教授）
（2）（きん　ぶんきょう　京都大学人文科学研究所教授）
（3）（こまつ　けん　京都府立大学文学部教授）
（4）（さとう　はるひこ　神戸外国語大学外国語学部教授）
（5）（たかはし　しげき　摂南大学国際言語文化学部教授）
（6）（たかはし　ぶんじ　大阪大学大学院文学研究科教授）
（7）（たけのうち　まこと　京都外国語大学外国語学部教授）
（8）（つちや　いくこ　同志社大学講師）
（9）（まつうら　つねお　大阪市立大学大学院文学研究科助教授）

氣英布校勘表

使用テキスト（〔　〕内は略称）

元刊本〔元〕・『元曲選』〔臧〕・『盛世新聲』〔盛〕・『詞林摘艶』〔詞〕・『雍熙樂府』〔雍〕・『納書楹曲譜』〔納〕

新刊關目漢高皇濯足氣英布

第一折

○テキスト：元刊本・『元曲選』「氣英布」・『納書楹曲譜』正集巻二「賺布」

〔元〕［止(正)末扮英布引卒子、開］厶(某)乃黥額夫□(英)布。□□覇王麾下鎮守着楊(揚)州六合淮地。漢中王有意東遷、衆臣子房已奏、陛下不可、有于子琪告變、不合襲於殿後。漢王不從、濉水大敗、折漢軍四十六萬片甲不回。

〔臧〕省略。

《仙呂》【點絳唇】

〔元〕楚將極多。漢軍微末△特輕可。戰不到十合。　　向濉水河邊×破。

〔臧〕○○○○。○○○○　眞○○。○○○○○。早已在○○○×○廂○。

〔納〕○○○○。○○○○　眞○○。○○○○○。早已在○○○×○廂○。

【混江龍】

〔元〕今番已過。這回不索起干戈。　主公倚仗着×范增英布、怕甚末韓信蕭何。

〔臧〕○○且○。○廻休再動○○。＊　　憑○喈○○○○、○○麼○○○○。

〔納〕○○且○。○回休再動○○。　　憑○喈○○○○、○○麼○○○○。

＊〔臧〕［帶云］喈項王呵、［唱］

〔元〕我則待獨分兒興隆起楚社稷、　怎肯交劈半兒停分做漢山河。［外云了］

〔臧〕喈待要○○○○○○○○○、那裏○×○○○○○○○○○。　×××

〔納〕喈待要○○×○○○○○○、那裏○×○○×○○○○○○。　×××

〔元〕×××××××　×××××××　×　×××××××　×××××××

〔臧〕常則是威風抖擻。斷不把鋭氣消磨。捧的箇當場賭命、怎容他遣使求和。＊

〔納〕常則是威風抖擻。斷不把鋭氣消磨。捧的個當場賭命、怎容他遣使求和。

＊〔臧〕［丑扮探馬上］［卒做報科云］喏、報元帥得知、有探馬報軍情到來也。［正末唱］

〔元〕堦直下人來報、××××××××× 不由我嗔容忿ヌ(忿)、

〔臧〕喈則見撲騰騰、這探馬兒闖入旗門左。○○喈○○○忿、 ＊

〔納〕喈則見撲騰騰、這探馬兒闖入旗門左。○○喈○○○忿、

＊〔臧〕［做拍案科、云］兀那探子、有甚的緊急軍情、與喈報來。［探子云］有漢王遣一使臣、喚做隨何、帶領二十騎人馬、特來迎報元帥、敬此報知。［正末唱］

〔元〕×××冷笑××呵ヌ(呵)。＊

〔臧〕都付與○○的這○呵。 ＊

〔納〕都付與○○的這○呵。

＊〔元〕［《云》］隋何來。他是漢家臣、這的是楚軍寨、他來這里有甚事。這漢好大膽呵。［怒唱］

＊〔臧〕［云］那隨何是漢家的臣子、喈這裏是楚家的軍寨、他爲什麼事要來迎接喈。那廝好大膽也。［唱］

【油葫蘆】

〔元〕這漢似三歲孩兒小覷我。 怎生敢恁末。 是他不尋思到此怎收羅。

〔臧〕那廝把○○○童○○○。便這等○○麼。難道○○○○○○○○○。

〔納〕那廝把○○○童○○○。便這等○○麼。難道○○○○○○○○○。

〔元〕恰便似寒森ヌ(森)劍戟傍邊過。有如他明彫ヌ(彫)斧鉞叢中坐。是他××忒不合。

〔臧〕○○○○○森 ○○峯頭臥。恰便似○○彫 ○○○○過。×○可也○○○。

〔納〕○○○○○森 ○○峯頭臥。恰便似○○彫 ○○○○過。×○可也○○○。

〔元〕×××忒聘(騁)過。恰便似×个飛蛾兒急颭颭來投火。 便是他自攬下一頭蹉。

〔臧〕他可也○放潑。 ○○○一箇○○○○○○○○○。這的○○○○○○○○。

〔納〕他可也○放潑。 ○○○××○○○○○○○○○。這的○○○○×○○○。

【天下樂】

〔元〕這漢滅相自家煞小可。如還我。不壞了他。則俺那楚王知到做了咱的罪過。

〔臧〕怎不教我登時殺壞他。便我做活佛活佛怎定奪。＊喈將他來意兒早識破。

〔納〕怎不教我登時殺壞他。便我做活佛活佛怎定奪。 喈將他來意×早識破。

＊〔臧〕［做沈吟科、云］哦、喈知道他來意了也。［唱］

〔元〕他待要使見識、廝勾羅。不由我按不住心上火。＊

〔臧〕他道是逞不盡口內詞、 却教喈案○○○○○。＊

〔納〕他道是逞不盡口内詞、　却教喒〇〇〇〇〇〇。

＊〔元〕〔《云》〕小校那里。如今那漢過來、持刀斧手便與□(我)殺丁(了)者。交那人過來。

＊〔臧〕〔帶云〕令人、一壁廂准備刀斧伺候者。〔卒云〕理會的。〔正末唱〕

〔元〕××××××××××××××　＊

〔臧〕喒如今先備下這殺人刀門扇似濶。＊

〔納〕喒如今先備下這殺人刀門扇似濶。

＊〔元〕〔等隋何過來見了〕〔唱賓〕住者。你休言語。我根前下説詞那。〔等隋何云了〕

＊〔臧〕〔云〕令人、與喒將隨何抓進來。〔卒應科〕〔隨何佩劒引從者上〕〔卒做拿隨何入見科〕〔隨何云〕賢弟、我與你是同鄉人、又是從小裏八拜交的兄弟、只爲各事其主、間別多年。今日特來訪你、只該降階接待纔是、怎麼教刀斧手將我簇擁進來、此何禮也。〔正末唱〕

【那吒令】　『納書楹曲譜』は【哪吒令】

〔元〕　三對面先生行道破。那里是八拜交仁兄來探我。是你个兩賴子隋何來説我。＊

〔臧〕喒道你這〇〇〇〇〇來瞰我。〇裏〇〇〇〇〇〇〇訪〇。多應是〇〇〇隨〇〇〇〇。＊

〔納〕喒道你這〇〇〇〇〇來瞰我。〇裏〇〇〇〇〇〇〇訪〇。多應是〇〇〇隨〇〇〇〇。

＊〔元〕〔等外云了〕

＊〔臧〕〔隨何云〕我好意來訪你、下甚麼説詞、要這等隄防我那、〔正末唱〕

〔元〕你××待要着死撞活。將功折過。你休那里信口開呵。

〔臧〕〇怕不〇××〇〇〇。×〇〇〇。×一謎裏〇〇〇合。＊

〔納〕×怕不〇××〇〇〇。×〇〇〇。×一謎裏〇〇分合。

＊〔臧〕〔隨何云〕賢弟、不是我隨何誇説、我舌賽蘇秦、口勝范叔、若肯下些説詞、也不由你不聽哩。〔正末云〕噤聲。〔唱〕

【鵲踏枝】

〔元〕你那里話兒多。着言語廝勾羅。你正是剔蝎撩蜂、暴虎馮河。

〔臧〕〇〇裏〇〇〇。×××〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇。

〔納〕〇〇裏〇〇〇。×××〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇。

〔元〕誰交你自創入龍潭虎窩。　飛不出地網天羅。

〔臧〕〇着〇鑽頭就鎖。　也怪不的喒故舊情薄。

〔納〕〇着〇鑽頭就鎖。　怪不的喒故舊情薄。

【寄生草】

〔元〕你將你舌尖來扛、我×將我劍刃×磨。我心頭怎按×無明火。我劍鋒磨×吹毛過。

〔臧〕○○那○○兒○、喒則○×○○兒○。喒○○早發起○○○。這○頭○的○○○。

〔納〕○○那○○兒○、×則○×○○兒○。喒○○早發起○○○。這○頭○的○○○。

〔元〕你舌頭便是亡身禍。　　你道是特來救我目前憂。嗷。你正是不知自己在壕中臥。＊

〔臧〕○○○○○○○○。*1　○○○○○○喒○○○。×　敢可也○○○○○○○坐。*2

〔納〕○○○○○○○○。　　○○○○○○喒○○○。×　敢可也○○○○○○○坐。

*1〔臧〕［隨何云］賢弟、你的亡身禍倒在目前、我隨何特來救你哩。［正末做喝科云］噤聲。（唱）

＊〔元〕［《云》］你道是救我來。你説我有甚罪過。［等外云三个死字了］［做背驚云］打呵打着實處、道呵道着虛處。這漢怎生知道。我雖有這罪過、如今赦了我也。［等天臣上云了］

*2〔臧〕［云］令人鬆了綁者。［卒做放隨何科］［正末云］且請禍來相見。［做拜科云］仁兄可也受驚了、彼此各爲其主、幸勿介懷。［隨何云］這也何足爲驚、只可惜、賢弟、你的禍就到了也。［正末云］喒的禍從何來。［隨何云］這等你敢説三聲沒禍麼。［正末云］不要説三聲、便百二十聲、喒也説。喒有什麼禍在那裏。［隨何云］賢弟、你是箇武將、只曉的相持厮殺的事、却不知揣摩的事。你道是項王親信、你比范增何如。［正末云］那范增是項王的謀臣、稱爲亞父、喒怎麼比的他。［隨何云］那范增爲着何事、就打發他歸去、死於路上那。［正末云］他則爲陳平反間之計、以太牢饗范增使者、以惡草具待項王使者、項王疑他歸漢、因此放還居巢、路上死的。［隨何云］賢弟既知范增見疑之故、則你今日之禍亦可推矣。［正末云］你道項王疑喒是些甚麼來。［隨何云］當日我漢王襲破彭城時、項王從齊國慌忙趕回、進則被漢王據其城池、退則被彭越抄其輜重、兵疲糧竭、自知不能取勝、所以特徵賢弟。一來憑仗虎威、二來要借這一枝生力人馬、壯他軍氣、眞如飢兒之待哺、何異旱苗之望雨。乃賢弟稱病不赴、欲項王無疑、其可得乎。若項王與漢戰而不利、勢方倚仗賢弟、再整干戈、倒也無事。今漢王大敗虧輸、項王意得志滿、更加以龍且之譖、日在耳傍、必且陰遣使臣、覘你罪釁、此不但范增之禍已也、賢弟請自思之。［卒子報云］喏、報元帥得知、楚國使命到。［正末做驚科］［唱］

【玉花秋】

〔元〕那里發付這殃人貨。勢到來怎生奈何。××楚國天臣還見×呵。其實也難收歛怎求和。＊

〔臧〕○裏○○○○○○。○○○如之○○。若是○○○○×見了○。○○×○廻避○收撮。＊

〔納〕○裏○○○○○○。○○○如之○○。若是○○○○×見了○。○○×○廻避○收撮。

＊〔元〕［《云》］小校裝香來。［《唱》］

＊〔臧〕［云］令人、快與喒裝香案、迎接者。［唱］

〔元〕我與你一下里相迎你且一下里趂。＊

〔臧〕　　喒○○裏○○○○○○裏○。＊

〔納〕　　喈○○裏○○○○○○裏○。

＊〔元〕［《云》］你且兀那屏風背後趂者。［等使命開了］［《云》］我道楚使來取我首級。却元來不是。到赦了我罪過。

＊〔臧〕［云］仁兄、你只在屏風後躲者。［淨扮楚使上、云］楚王手勅到來、英布跪聽者。［勅曰］天祚吾楚、寡人親率萬騎、擊劉季於靈壁之東、破其甲士四十六萬、一時睢水爲之不流。汝雖病不能赴、亦無籍汝爲也、茲特布捷書、使汝聞知。汝其加餐自愛、以胥後會。［正末跪受勅科］［背云］喈被那厮這一番説話、只道楚使之來、必然見罪、取喈首級、却元來是宣捷的。早使那厮預先躲過、不等使臣看見、也還好哩。［唱］

【後庭花】　元刊本作【后亭花】

〔元〕不爭這楚天臣明道破。却把你个漢隋何謊對脱。＊

〔臧〕○○○○○○○○○。○○○箇○隨○○○○。＊

〔納〕○○○○○○○○○。×○○個○隨○○○○。

＊〔元〕［《云》］　　去了天臣呵。［《唱》］

＊〔臧〕［帶云］喈則等使臣去了呵。［唱］

〔元〕我如今喚你來從頭兒問、隋何看你×支吾咱説个甚末。

〔臧〕　喈便○他○○○○○、××○他巧○○×○箇○摸。

〔納〕　喈便○他○○○×○、××○他巧○○×○個○麼。

〔元〕　這風波。　　忒來的歇禍。元來都番成他的佐科。＊

〔臧〕喈起○○。都自己惹灾招○。且看他這一番怎做○。那一番怎結末。＊

〔納〕喈起○○。都自己惹災招○。且看他這一番怎收○。那一番怎結末。

＊〔元〕［等外出來共使命相見了］［做門外猛見科《云》］這漢大膽麼。誰請你來、自走出來了。［做共外打手勢科《云》］你且藏者。

＊〔臧〕［隨何做出見楚使云］英布業已歸漢、你來此怎麼。［楚使云］英將軍、這是何人。［正末做不能應科］［隨何云］我是漢王使者隨何、因你項王聽信龍且之譖、使英布不能自安、已擧九江之兵歸降於漢、特遣小官親率二十餘騎到此迎接。我饒你快回去罷。［楚使云］英將軍、你豈有降漢之理。［正末做不能應科］［隨何云］賢弟、你既歸漢、便當背楚、却騎不得兩頭馬的。今已被楚使看見、不如殺之、以滅其口。［做拔劍殺楚使科］［正末做奪劍不及科］［云］）仁兄、則被你害殺喈也。［唱］

【金盞兒】

〔元〕諕的我面没羅。口答合。　想伊×××××××膽到天來大。

〔臧〕○○喈○○○。○搭○。誰似你這一片横心惡○×○○○。

〔納〕○○喈○○○。○搭○。誰似你這一片横心惡○×○○○。

〔元〕料應把那口吹毛過的劍先磨。　　坑察的着咽脛(頸)、　　血嚦ヌ(嚦)帶着肩窩。
〔臧〕没來由引將狼虎屋中窩。　這一箇宣捷的有甚麼該死罪、這一箇仗劍的莫不是害風魔。
〔納〕没來由引將狼虎屋中窩。　這一個宣捷的有甚麼該死罪、這一個仗劍的莫不是害風魔。

〔元〕不爭你殺了他楚使命、則被你送了我也漢隋何。＊
〔臧〕○○○○○○○○○、○○○○○喈○○隨○。＊
〔納〕○○○○○○○○○、○○○○○喈○○隨○。
＊〔元〕[《云》] 拿着那漢者。這人大膽、俺楚家使命、你如何敢殺了他。[等外云了] [《云》] 我門外搖着手、意里道你且休出來、且藏者。我幾時交你殺了他使命來。[等外再云了] [怒云] 小校拿着這漢。咱見楚王去來。[等外云了] [做慘科] [背云] 我若拿將這漢見楚王去、這漢是文字官、不曾問一句、敢説一堆老婆舌頭。我是个武職將、幾時折辨過來。[做尋思科、住]
＊〔臧〕[云] 令人、拿下隨何、待喈送他親見項王去來。[卒應做拿隨何科] [隨何云] 不消綁得、我就隨你見項王去。你那箇對頭龍且、正在項王左右、我又是箇辯士、一口指定你要舉兵歸漢、着我引二十騎來迎接也是你來、着我殺楚使滅口也是你來。你説的一句、我還你十句、看道項王疑我、還是疑你、那龍且譖我、還是譖你。[正末做嘆氣科、云] 嗨、喈若拿那厮見項王去、那厮是能言巧辯之士、口裏含着一堆的老婆舌頭。喈是箇麤鹵武將、到得那裏、只有些氣勃勃的、可半句也説不過來。罷、罷、罷、喈也不要你去了、令人、且放了他者。[卒做放科] [正末唱]

【鴈兒】　『納書楹曲譜』作【醉鴈兒】
〔元〕楚王若是問我。　＊
〔臧〕○○○○○英布。＊
〔納〕○○○○○英布。
＊〔元〕[《云》] 英布。他是漢家、咱是楚家。你不文書叫他去沙、他如何敢來。[《唱》]
＊〔臧〕[帶云] 那項王問道他是漢家、你是楚家、若是你不將書去接他。[唱]

〔元〕到底難將伊着末。　你恰施劣缺、顯雄合。　你个哥。＊
〔臧〕他怎敢便帶領着二十人。到軍寨裏鬧鑊鐸、那其間哥。
〔納〕他怎敢便帶領×二十人。到軍寨裏鬧鑊鐸、那其間。
＊〔元〕[《云》] 哎你殺了他楚使。[《唱》]

〔元〕　却不道我如何。＊
〔臧〕可教喈答應是○○。＊
〔納〕可教喈答應是○○。

＊〔元〕［《云》］似此怎生了。［等外云降漢了］［《云》］你交我降你漢家。這楚王不曾虧我。我便降漢、肯重用麽。［外云了］

＊〔臧〕［隨何云］賢弟、你只説已擧兵降漢便了。［正末云］事勢至此、也不得不歸漢了。只一件要與你説過、嗜在楚、項王相待頗重、如今要漢王待嗜更重如項王、嗜方甘心背楚歸漢也。［隨何云］那項王待你有甚重處。你與他救鉅鹿、破秦關、殺義帝、功非小可、只封的你當陽君之職。我漢王豁達大度、凡克城邑、卽便封賞、曾無少吝、所以英雄之士、莫不歸心。賢弟、你不見韓信乎。他本一亡將、聽蕭何之薦、卽日築臺拜爲大帥。何況賢弟雄名久著、漢王必當重用、取王侯如反掌耳。請賢弟早決歸降之心、無使自誤。［正末唱］

【收尾】　鄭本・徐本・『元曲選』・『納書楹曲譜』作【賺煞】

〔元〕×休把我廝催逼、相擡掇。英布去今番去波。我若是不反了重瞳楚項藉(籍)。

〔臧〕你○將嗜○○○、○○○。○○也○○○○。　不爭我服事○○没箇結果。

〔納〕×○將嗜○○○、○○○。○○也○○○○。　不爭我服事○○没個結果。

〔元〕赤緊的做媳婦兒先惡了翁婆。怎存活。×便似睜着眼跳黄河。

〔臧〕○○○○○○×○○○公○。○○○。恰○○○○○○○○。

〔納〕○○○○○○×○○○公○。○○○。恰○○○○○○○○。

〔元〕你則着我歸順您×××君王較面闊。你這里怕不×千般兒啜摩。

〔臧〕○×○嗜○○他隆準的○○○○○。○○裏○○有○○×揣○。

〔納〕○×○嗜○○×隆準的○○○○濶。○○裏○○有○○×揣○。

〔元〕却將我一時間謾過。交人我則怕你没實誠閑話我赤心多。［下］

〔臧〕○○嗜○○○瞞○。×××○○○弄的嗜做了尖擔兩頭脱。［卒隨下］＊

〔納〕○○嗜○○○瞞○。×××○○○弄的嗜做了尖擔兩頭脱。

＊〔臧〕［隨何云］那英布歸漢了也。我若是不殺他楚使、他怎肯死心榻地便肯歸降。我當時在漢王根前曾出大言、如今果應吾口也、與儒生添多少光彩。只等英布兵起之日、我引著二十騎隨後進發便了。［詩云］兵間使事誰能料、當陽片言立應召。從此儒冠穩放心、免教又染君王溺。［下］

第二折

○テキスト：元刊本・『元曲選』

〔元〕［正末上《云》］隋何、咱閑口論閑話、這里離城皐關則是一射之地。你言請我降漢、交天子擺半張鸞(鑾)駕出境來接、兀的天子爲甚不來接。［等外末云了］［《云》］你是个謊説的好。

〔臧〕……［正末云］這等可知道來。喈如今到成皐關隔的一射之地、喈也道漢家怎沒些兒糧草接濟喈家軍馬、這便罷了、則論尋常受降之禮、也該遣人相迎才是。［隨何云］賢弟、待不才先去報知漢王、着他擺半張鸞駕、出境迎接、你意下如何。［正末云］只是不該重勞仁兄。［隨何做別科云］這箇是我做典謁的本等。［詩云］暫時匹馬去、少刻八鸞迎。［下］［正末云］隨何去也、便漢王患箭瘡不能出境親接、少不的將官也差幾箇迎喈。令人、分付衆軍馬慢慢行者。［衆應科］［正末唱］

【一枝花】

〔元〕抵多少不欽奉皇○(帝)宣、不遵敬將軍令。不由我不背反、不由我不掀騰。

〔臧〕○○○×遵承帝王　○、×稟受○○○。○○喈○叛○、○○喈○○○。

〔元〕　兩國巉(攙)爭。　難使風雷性。三不歸一滅行。

〔臧〕現如今○○呑　併。使不的○○○。且朦朧入漢城。

〔元〕着死圖生。　劍斫了×差來的使命。

〔臧〕也是喈不合就聽信了這一謎的浮詞、○砍○那○○○○○。

【梁州】　元曲選作【梁州第七】

〔元〕不由我實丕ヌ(丕)興劉滅楚、却這般笑吟ヌ(吟)背暗投明。

〔臧〕却教喈○○丕　○○○○、×××○○吟　○闇○○。

〔元〕×××太平只許將軍定。折末×提人頭廝摔、噙熱血相噴。

〔臧〕這的是○○本是○○○。○○他○○○○○、噴○○○傾。

〔元〕折末勢雄ヌ(雄)廝併。　威糾ヌ(糾)相持、　齊臻ヌ(臻)領將排兵。鬧垓ヌ(垓)虎鬬龍爭。

〔臧〕××○○雄要分箇成敗、○○糾要決箇輸贏。○○臻　○○○○。○○垓　○○○○。

〔元〕俺也曾濕浸ヌ(浸)臥雪眠霜、　圪搽ヌ(搽)登山驀嶺。俺也曾緝林ヌ(林)劫寨偸營。

〔臧〕喈○○○○浸　○○○○、喈也曾磕擦擦　○○○○。喈○○○○林　○○○○。

〔元〕隋何×喈是×綰角兒弟兄。×××漢中王不把咱欽敬。都説他×××是眞命。

〔臧〕隨○也○○你○○○○○。怎生來○×○○○喈○○。你○○有龍顔○○○。

〔元〕　似這般我覷重瞳×××煞輕省。　那武藝我手里怎地施呈。＊

〔臧〕因此上將楚國○○看的忒○○。　哎。隨何也須索箇心口相應。＊

＊〔元〕［做到寨科］［城外屯軍了］［等外末云了］［《云》］我則這營門外等者。你則疾出來。

＊〔臧〕［卒報云］稟元帥得知、已進成皐關了也。［正末云］那隨何去了許久、怎生還不見漢王出來迎接、這也可怪。［做沈吟科云］怎麼連隨何也不來了、令人、與喈箚下營寨者。［卒云］理會的。［正末唱］

【隔尾】

〔元〕我這里撩衣破步寧心等。瞑目攢眉側耳听。我恰待高叫聲隋何、＊

〔臧〕　喈這屯營箚寨○○○。瞋○○○○○聽。×○○○○○隨○、

＊〔元〕［《云》］那漢一步八个謊。［《唱》］

〔元〕　　却也喚不嚏(應)。我則道是有人×覷了這動靜。＊

〔臧〕你那一步八箇謊的可○○○應。　　喈○○○○○來○×喈○○。＊

＊〔元〕［《云》］元來不是人。［《唱》］

＊〔臧〕［做看科云］可不是。［唱］

〔元〕×××××××××××

〔臧〕喈則道是有人來供喈使令。＊

＊〔臧〕［做看科云］可又不是呸。［唱］

〔元〕却是這古剌ヌ(剌)風擺動營門前是這××繡旗×影。＊

〔臧〕○元來撲○剌　　○○○轅○××這一幅○○的○。＊

＊〔元〕［等外出來了做怒云］鸞(鑾)駕那里也。隋何、我知道、自古已來、那里有天子接降將礼來。隋何、一句話、則是你忒説口了些个。［做過去見駕拜住］［做猛見濯足科］［做氣煩惱意科］［怒唱］

＊〔臧〕［隨何上］［正末做見怒科、云］喈問你這半張鸞駕恰在那裏。［隨何云］賢弟、我不才失言了。漢王若是箭瘡好了、莫説半張鸞駕出境迎接、便是全副鸞駕也不爲難。只因瘡口未收、不便勞碌。況他周勃・樊噲一班大將、都是尚氣的人、在漢王根前説你初來歸降、未有半根折箭功勞。自古以來、那曾見君王親迎降將之禮。我不才道是賢弟虎威、非他將可比、爭些兒磨了半截舌頭。終是漢王爲樊噲等所阻、使不才説了謊話、如之奈何。（正末云）事已至此、難道他不來迎、喈依舊回還九江不成。如今漢王在那里。待喈見去。（隨何云）漢王現臥帳中、你隨我入營見來。（正末云做臨古門見科）（漢王引二宮女上做濯足科）（正末做怒科）（唱）

【牧羊關】

〔元〕分明見劉沛公濯雙足、　慢自家有四星。　却交我撲鄧ヌ(鄧)按不住雷霆。

〔臧〕○○○○○○○○○、覷當陽君没半○。直氣的喈不○鄧　　○○○○○。

〔元〕眼睜ヌ(睜)謾打回合、氣撲ヌ(撲)還添意掙。××××怒從心上起、惡向膽邊生。
〔臧〕○○睜　　慢○○○、○○撲　　重○籐○。不由喒不○○○○○、○○○○○。

〔元〕却不×見客如爲客、您做的个輕人還自輕。＊
〔臧〕○○道○○○○○、××××○○○○○。＊
＊〔元〕［做怒住。出來氣科《云》］濯足而待賓、我不如你脚上糞草。衆軍聽我將令、則今日便回去。［等外云了］［《云》］住ヌ(住)、我若見楚王、楚王問我、英布、你降漢家、今日不用你也、你却來。與推轉者。海、這的便好道有家難奔、有國難投。
＊〔臧〕省略

【哭皇天】
〔元〕誰將我這背(臂)膊來牢扶定。［外云了］［怒放］待古你是××知心好伴等。
〔臧〕是誰人這般信口胡答應。　　大古裏○你箇○○○○○。

〔元〕潑劉三端的是、ヌヌ(端的是)負功臣。　既劉沛公無君臣××義分。
〔臧〕××××××　××　　×××　則你那○○○○○○的新○○。

〔元〕嗏漢隋何×喒×有甚麼相知××面情。＊
〔臧〕哎×隨○也○與你○○弟兄的舊○○。＊
＊〔元〕［帶云］你把劉邦來奚落、將英布相扶。［《唱》］
＊〔臧〕省略

〔元〕這公事其中間都是你××的嬖倖。　你殺了他生性。你失了他信行。＊
〔臧〕○××○×○○○○隨何×弊○。據着喒一生氣性。半世威風。若不看你少年知識往日交遊、只消喒佩中劍支楞支楞的響一聲。折末你能言巧辯、早做了離鄉背井。
＊〔元〕［帶云］若不看從來相識、往日班行、這堝兒翻了面皮。

【烏夜啼】
〔元〕敢交你這漢隋何這答兒里償了俺那天臣命。×××漢中王見面不如聞名。
〔臧〕那其間○○隨○×××不○○喒×○○○。則你箇劉沛公○○○○○○。

〔元〕　分明見把自家倩。交你做了人情。交我□浦滕。
〔臧〕你道是善相持能相競。用不着喒軍馬崩騰、武藝縱横、

〔元〕　覷楚江上(山)××似火上弄冬凌。漢乾坤×××如碗内拿蒸餅。

〔臧〕則教你○○山　　覷不得○○○氷○。○○○也做不得○○○○○。

〔元〕　　你×也不言語、不答應。　　却不但行好事、　莫問前程。＊
〔臧〕哎隨何也○怎麼○○○、○承領。從今後將軍不下馬、各自奔○○。
＊〔元〕［等外云了］［做氣怒科《云》］四十萬大軍听者。我也不歸漢。也不歸楚。一發驪山内落草爲賊。隋何、我説與你。我若反呵、抵一千个覇王便算。［做氣不忿科］

○臧本（『元曲選』）は、ここに【罵玉郎】【感皇恩】【採茶歌】の各曲が入る。

【收尾】　『元曲選』作【煞尾】
〔元〕不爭×漢中王這一遍無行逕（徑）。單注着劉天下爭十年不太平。
〔臧〕○○教劉沛公○○徧○○徑。　　○○定漢○○有○○○○○。

〔元〕心中焦意下顯。氣如虹汗似傾。劉家邦怎要清。劉家邦至不寧。
〔臧〕他只要自稱尊、自顯能。覷的人糞土般汚、草芥般輕。激的喈引領大兵。還歸舊境。

〔元〕怨隋何枉保奏、自摧殘自急竟。　　幾番待共這説我的隋何×不干淨。＊
〔臧〕汗似湯澆、怒似雷轟。直抵着二十箇覇王没的支撑。連你箇○喈的隨○也○乾○。＊
＊〔元〕［等外末云了］［打喝］［唱］

〔元〕你那里噤聲くく（噤聲）。誰待將恁那没道礼（理）的君主他那聖○（旨）來等。［下］
〔臧〕×××××××　　○○○你○無○×　　○○王×做○明　　○○。＊
＊〔臧〕省略

第三折
○テキスト：元刊本・『元曲選』
〔元〕［正末上、怒云］休動樂者。英布、你自尋下這不快活來受。
〔臧〕省略

【端正好】
〔元〕　　鎮淮南、無征鬪。倒大來散袒（誕）優游。
〔臧〕則喈這○江淮、○○○。○○○○誕　　○○。

〔元〕　　信隋何説謊謾人口。　待把富貴奪功名就。
〔臧〕不爭的○隨○○○○天○。你道喈封王業時當○。

【滾繡毬】

〔元〕折末恁皓齒謳。綿臂轉(韝)。列兩行翠裙紅袖。製造下百味珍羞。

〔臧〕○○○○○○。○瑟搦。　　○○○○○○○。更擺設○○○饈。

〔元〕顯的我越出醜。好呵我元來則爲口。待古里不曾喫×酒肉。

〔臧〕○○喈○○○。××却○○○○○。大○裏○○○些○○。

〔元〕　您送的我荒ヌ(荒)有國難投。　恁便做下那肉麵山也壓不下我心頭火、

〔臧〕則被○○○人××　也○○○○。折末您×造起×○麪○○○○○喈○○○、

〔元〕造下那酒食海也充(洗)不了我臉上羞。須有日報冤讐。［等外把盞科］［做不喫酒科］

〔臧〕鑿成×○醴○○洗　　○○喈○○○。怎做的楚國亡囚。＊

【倘秀才】

〔元〕既×共俺×參辰卯酉。誰×吃恁這閑茶浪酒。

〔臧〕×喈與您做○○○○。○待喫×○○○○○。＊

＊〔臧〕［隨何云］賢弟、這一位是軍師張子房。［正末唱］

〔元〕×你一个燒棧道的先生忒絶後。你當日×施謀略、運機疇(籌)。煞有。＊

〔臧〕哎您這箇○○○○○○○○○。您○○箇○○○、○○籌。　　○○。＊

＊〔元〕［等子房云臣僚了］［《云》］丞相、你説漢朝有好將軍、好宰相、有誰、你説。［等子房云王陵了］［《云》］王陵比我會沽酒。［等又云周勃了］［《云》］周勃比我會吹簫送殯。［等又云隋何了］［《云》］您漢朝子一个好隋何。［等隋何云了］［《云》］他隋何祖上是燕國上大夫。他家里會鑽秤。［《等子房云樊噲了》］［《云》］您子一个好樊噲。［等子房云了］

＊〔臧〕［隨何云］這一位是建成侯曹參。［正末云］好曹參、他會提牢押獄哩。［隨何云］這一位是威武侯周勃。［正末云］好周勃、他會吹簫送殯哩。［隨何云］這一位是平陰侯樊噲。［正末云］好樊噲、他會宰猪屠狗哩。［樊噲做怒科云］他笑我屠狗麽、咄、你是黥布、我可也不似你會殺人放火做強盜。［正末唱］

【滾繡毬】

〔元〕　一个樊噲封做萬戸侯。他比我××會殺狗。　　托賴着帝王親舊。　統領着百萬貔貅。

〔臧〕元來這○○也○○○○。○○喈單則○○○。無過是○○○君○○○。現○○○○○○○。

〔元〕　和我不故友。枉插手。他怎肯去漢王行保奏。　我料來子房公子你傖頭。

〔臧〕他○喈非○○。○○○。○○○○當今×○○。哎元來這○○也是箇○○。

〔元〕　　一池綠水渾都占、　却怎不放傍人下釣鈎。不許根求。＊

〔臧〕您待把○○○○○○佔、您生來○○○○○○舟。却教喈何處吞鈎。＊

＊〔元〕［等外云了］［《云》］丞相這般說、我來降漢、我須没歹意。您濯足而待賓、我不如您脚上糞草。［《等外云了》］［《云》］是天子從小里得來的證候。

【脱布衫】

〔元〕那時節×豐沛縣里草履團頭。　　早晨間露水里尋牛。驪山驛監夫步走。拖狗皮醉眠石臼。

〔臧〕○○○在○○○×○○○○。常則是○辰○○○裏○○。○○○○○○○。○○○○○○○。

【小梁州】

〔元〕　那時節偏没這般淹證候。　　陡恁的納諫如流。　　輕賢傲士慢諸侯。

〔臧〕這的是從小裏染成腌○○。可不道服良藥○○○○。誰似你這般○○○○没謙柔。

〔元〕　　無勤厚。　　惱犯我如潑水怎生收。＊

〔臧〕激的喈爲讐寇。到如今都做了○○○○○。＊

＊〔元〕［《云》］我不認得恁劉沛公、放二四、拖狗皮、是不回席。［《駕上》］［《云》］兀的不羞殺微臣。［等駕做住、把盞了］

〔元〕【唱(么)】被聖恩威攝(懾)的忙饒後。見笑吟ヌ(吟)滿捧着金甌。見他忙勸酒。施勤厚。＊

〔臧〕【么篇】喈則道遣紅粧來進這黄封酒。恰元來劉沛公手○○○○。××相○酬。能○○。＊

＊〔元〕［《云》］怎生見天子待花白一曾來。却又無言語了。［《唱》］

＊〔臧〕［帶云］喈本待見漢王、花白他幾句、這一會兒喈可不言語了。［唱］

〔元〕×××××××××××××　哎無知禽獸。英布×你×如××鑞槍頭。

〔臧〕早則被天威攝的喈無言閉口。哎××××　○○也○是箇銀様○鎗○。＊

＊〔元〕［等駕跪着把盞科］［做接了盞兒荒科］［背云］後代人知、漢中王幾年幾月幾日、在館驛内跪着英布吃了一盞酒、便死呵也死的着也。［拜唱］

＊〔臧〕［正末做背科云］今日這一杯酒不打緊、使後代人知、漢王幾年幾月幾日、在英布營裏跪送一杯酒。喈英布死便死也死的着了也。［做回身拜謝科、云］謝大王賜酒。［唱］

【叨叨令】

〔元〕請你一个漢中王龍椅上端然受。早來××子房公半句兒無虚繆(謬)。

〔臧〕○○×箇○劉○○○○○○○。○○到張○○×○○○○○謬。

〔元〕光祿司幾替兒分着前後。教坊司一派×簫韶奏。

〔臧〕○○寺○○○○×○○。○○○○○的笙歌○。

〔元〕英布你早倒快活×也末哥、ヌヌヌヌヌ(你早倒快活也末哥)、這般受用××誰能勾。
〔臧〕××兀的不○○殺也麼哥、兀的不快活殺也麼哥、　　似○○○○可也○○○。＊
＊〔臧〕［云］大説漢王見臣子們動不動嫚罵、全無些禮體。今日看起來、都是妄傳也呵。［唱］

【剔銀燈】
〔元〕　　舌剌ヌ(剌)言十妄九。村棒ヌ(棒)的呼么喝六。查沙着打死麒麟手。
〔臧〕喒則道○○剌　　○○○○。○○棒　　×○○○○。○○○○○○○○。

〔元〕這的半合兒敢慢罵××諸侯。　　就里則是××个大村叟。龍椅上把身軀不收。
〔臧〕○×○○○○×○偏了○○。元來他罵的也○○鄉間漢田下○。須不共英雄輩做敵頭。

【蔓精(菁)菜】
〔元〕捋袒開龍袍叩(扣)。　依法次坐着那豐沛縣里麥場頭。轅軸。
〔臧〕則見他坦心腹披袍袖。依然似枌榆社麥場秋。　　笑吟吟自由。

〔元〕舉止雖然不風流。　　就里没唻和衝寛厚。
〔臧〕××雖然做不得吐哺握髮下名流。也是喒的風雲湊。＊
＊〔臧〕［漢王做醉睡科］［張良云］俺主公醉了也。隨大夫、你護送回營去者。［隨何扶漢王下］［張良云］請問元帥、幾時起兵救彭越去。［正末云］大王回營去了。那救彭越之事、如救火一般、豈可停留時刻的。看末將卽日傳令、提兵擊項王去來。［樊噲云］你不如把這元帥的牌印讓與我老樊。當日鴻門宴上、我老樊只除下兜鍪、把守轅門的軍校一時打倒、諕得項王在坐上骨碌碌滚將下來、你可知道麼。［張良云］前日韓信拜了元帥、就壇上點名、便先斬了英蓋一員大將。今日英元帥也是俺主公親拜的、牌印在手、他要割你這頭、可也容易。［樊噲云］他也割得頭的。這等、只不如屠狗去也。［正末唱］

【柳青娘】
〔元〕　早是君王帶酒。休驚御莫聞奏。　　子房公免憂。看英布統戈矛。
〔臧〕眼見得○○○○。○○○○○○。喒囑付您箇張○○×莫愁。○○○○○○。

〔元〕今番不是誇强口。楚項藉(籍)天喪宇宙。漢中王合覇軍州。
〔臧〕○○○○强誇○。○重瞳　　○亡○○。○劉○○○○○。

〔元〕　　此番絶、今後了、這回休。

〔臧〕管教他似雀逢鷹、羊遇虎、一時○。

【道和】

〔元〕把軍收。ヌヌヌ(把軍收)。×江山安穩揔屬劉。不剛求。

〔臧〕○○○。把軍收。　　看○○○○盡○○。○○○。

〔元〕看咱ヌヌ(看咱)恩臨厚。交咱ヌヌ(交咱)難消受。終身答報志難酬。恨無由。

〔臧〕想喒想喒　　○○○。教喒教喒　　○○○。　這報答○○○。肯遲留。

〔元〕直殺的喪荒坵(丘)。遙觀着征騁驟。都交他望風走。看者ヌヌ(看者)咱征鬪。

〔臧〕××××××　　撲騰騰○○　　○。××××××　○○看者　　喒爭○。

〔元〕您每ヌヌ(您每)休來救。看者ヌヌ(看者)咱征鬪。都交死在咱家手。×荒郊野外横尸首。

〔臧〕都教望着風兒走。　　○○看者　　喒爭○。○教○○喒○○。看沙場血浸○屍○

〔元〕直殺的馬頭前急留古魯ヌヌヌ(魯魯魯)亂衮(滾)死〃〃〃(死死死)死人頭。

〔臧〕○○○○○○○○○○×××　　○滾滾　○死死×　　○○○。

〔元〕　【隨煞】免了媿(魏)豹憂。報了濉水讐。×殺的塞斷中原江河××溜。

〔臧〕【啄木兒尾】○○彭　　越○。○○睢○○。直○○○○××○○滔天○。

〔元〕早子不從今已後。兩分家國指鴻溝。[下]

〔臧〕○則○○○○○。○○疆界○○○。[同卒下] *

* 〔臧〕省略

第四折

○テキスト：元刊本・『盛世新聲』・『詞林摘艶』巻九無名氏「氣英布雜劇」・『雍熙樂府』巻一「覇王戰英布」・『元曲選』

〔元〕[正末〈上〉拿砌末扮探子上]

《黄鐘》【醉花陰】

〔元〕　楚漢爭鋒竟(競)寰宇。　楚項藉(籍)難贏(贏)敢輸。此一陣不尋俗。
〔盛〕　○○○○競　還○。　○○籍　誰贏　敗○。○○○○○○。
〔詞〕　○○○○競　○○。　○○籍　誰贏　敗○。○○○○○○。
〔雍〕　○○○○定　○○。　○○籍　○贏　敗○。○○○○○○。
〔臧〕俺則見○○○○競　○土。那○覇王　肯甘心　伏○。○○○○○○。

〔元〕　英布××誰如。據慷慨堪堆擧。
〔盛〕　○○××○○。○○○○称許。
〔詞〕　○○××○○。○○○○稱許。
〔雍〕　○○××○○。拒○○○稱許。
〔臧〕這漢○○武勇○○。○○○○稱許。

〔元〕【喜遷鶯】多應敢會兵書。　没××半霎兒　＊　熬番×楚覇主。
〔盛〕　知韜略曉○○。　無他那○○○　○○了○項羽。
〔詞〕　知韜略曉○○。　無他那○○○　○○了○項羽。
〔雍〕　善韜畧曉○○。　無××○○○　○○了○項羽。
〔臧〕　善韜畧曉○○。*1　○××○○○　早○翻了○項羽。*2

＊〔元〕［《云》］嗏出馬來。［《唱》］
*1〔臧〕［帶云］出馬來、出馬來。［唱］　*2 省略

〔元〕　他那壁古剌ヌ(剌)門旗開處。　楚重瞳×陣×上高呼。無徒。殺人可恕。
〔盛〕【喜遷鶯】×××骨○ヒ　○○○○。　○○○在○面○○○。○○。○○○○。
〔詞〕【喜遷鶯】×××骨○剌　○○○○。　○○○在○面○○○。○○。刹○○○。
〔雍〕【喜遷鶯】×××骨○剌　○○○○。　○○○×○面○○○。○○。○○○○。
〔臧〕【喜遷鶯】×××骨○剌　旗門○○。那○○○在○面○○○。○○。○○○○。

〔元〕情理難容相欺負。　厮耻辱。　他道我看伊不輕、　我負你何辜。
〔盛〕○○○○這匹夫。他兩箇○○○。　一箇道○○○○、　他道是○○○○。
〔詞〕○○○○這匹夫。他兩箇○○○。　一箇道○○○○、　他道是○尓○○。
〔雍〕○○○○這匹夫。你兩箇○○○。　一箇道○你非○、　他道是○○○○。
〔臧〕○○○○這匹夫。兩下裏○○○。那一箇道待你非○、這一箇道○○○○。＊
＊〔臧〕

【出隊子】

〔元〕喈這壁先鋒前部。會支分能對付。床ヌヌ(床床)響颼ヌ(颼)陣×上發×金錞(鏇)。

〔盛〕俺○里○○英布。○○○○擺布。咪ヒ×　冷○ヒ　○面○○×○鏇。

〔詞〕俺○里○○英布。○○○○擺布。咪咪×　冷○颼　○面○○×○鏇。

〔雍〕俺○裏○逢英布。○○○○擺布。咪咪咪的　冷搜搜　○面○○×○鈚。

〔臧〕俺○裏○○○○。○○○○○○。咪咪咪　○○颼　○×○○箇○鏃。

〔元〕沙ヌヌ(沙沙)齊臻ヌ(臻)披(坡)前排　士卒。牙　僕剌ヌ(剌)的垓心里驟戰駒。

〔盛〕火ヒ×　○○ヒ　軍　○列着○○。呀呀呀我則見不○ヒ　○○○×○○○。

〔詞〕火火×　○○臻　軍　○列着○○。呀呀呀我則見不○剌　○○○×○○○。

〔雍〕火火火　○○臻　軍　○列着○○。呀呀呀我則見不○剌　×○○×○○○。

〔臧〕火火火　○○臻　軍　○列着○○。呀呀呀俺則見×××　×○○裏○○○。＊

＊〔臧〕

【刮地風】

〔元〕鼕ヌ(鼕)不待的三聲凱戰鼓。火火古剌ヌ(剌)兩面旗舒。

〔盛〕○鼕鼕　×××○○索○○。××骨○ヒ　○○○○。

〔詞〕○鼕鼕　×××○○索○○。××骨○剌　○○○○。

〔雍〕○鼕鼕　×××○○○○○。××骨○剌　○○○○。

〔臧〕○鼕鼕　○○○○○○○○。××忽○剌　○○○○。

〔元〕脫ヌ(脫)僕剌ヌ(剌)二馬相交處。　喊振天隅。我子見一來一去。不當不覩。

〔盛〕××　登時間　○○○○○。則聽的　○震○○。○則○○○○○。○見贏輸。

〔詞〕××　登時間　○○○○○。則聽的　○震○○。○則○○○○○。○見贏輸。

〔雍〕××　登時間　○○○○○。則聽的　○震○○。○則○○○○○。○見贏輸。

〔臧〕××　撲騰騰　○○○○○。則聽的鬧垓垓○震○○。俺則○○○○○。○見贏輸。

〔元〕兩疋馬、兩个人、有如星注。　使火尖鎗的××楚項羽。　是他便剌×胸脯。

〔盛〕○○○、○員將、○○○○。　一箇是○○○他是那○○○。忽的　早正○×○匍。

〔詞〕○○○、○員將、○○○○。　一箇是○○○他是那○○○。忽的　早正○×○匍。

〔雍〕○○○、○員將、○○○○。　一箇○○○○他是那○○○。忽的　早正○×○○。

〔臧〕○匹○、○員將、○○○○。那一箇○○○○正是他○○○。忽的呵早×○着○○。＊

＊〔臧〕省略

【四門子】

〔元〕九江王　那些兒英雄處。火出(尖)《鎗》輕ヌ(輕)早放過去。

〔盛〕俺英布　○○×○○○。見鎗　　來○ヒ的　×○○○。

〔詞〕俺英布　○○×○○○。見鎗　　來○輕的　×○○○。

〔雍〕俺英布　○○×○○○。見鎗　　來○輕的　×○○○。

〔臧〕俺英布正是他的○○○。見鎗　　來早○輕的　×○○○。

〔元〕兩員將各自尋門路。動彪軀△輪巨毒。虛里着實、ヌ(實)里着虛。

〔盛〕○○○○○○○○。整○○△統○○。○○○○、ヒ　　○○○。

〔詞〕○○○○○○○○。整○○△統○○。○○○○、實　　○○○。

〔雍〕○○○○○○行○。整○○△統○○。○裏○○、實　　裏○○。

〔臧〕○○○○○○○○。整○○△○○○。○裏○○、實　　裏○○。

〔元〕厮過謾各自依法度。虛里着實、ヌ(實)里着虛。　　呵連天喊擧。

〔盛〕○○瞞○○施○○。○○○○、ヒ　　○○○。則聽的○○○○。

〔詞〕○○瞞○○施○○。○○○○、實　　○○○。則聽的○○○○。

〔雍〕○○瞞○○施○處。○裏○○、實　　裏○○。則聽的○○○○。

〔臧〕○○瞞○○○○○。○裏○○、實　　裏○○。則聽的○○○○。

【山(水)仙子】　　盛本・詞本・雍本・臧本作【古水仙子】

〔元〕分ヌヌ(紛紛紛)〈ヌ〉濺土雨。靄ヌ(靄)黑氣黃雲遮　太虛。

〔盛〕紛紛紛　　踐○○。○靄靄　○霧○○○　○○。

〔詞〕紛紛紛　　踐○○。○靄靄　○霧○○○　○○。

〔雍〕紛紛紛　　踐○○。○靄靄　○霧○○○了○○。

〔臧〕紛紛紛　　○○○。○靄靄　○○○○○了○○。

〔元〕滕(騰)ヌ(騰)馬蕩動征塵、隱ヌ(隱)《隱》人盤在殺霧。吁ヌ(吁)《吁》馬和人都氣出。

〔盛〕不刺ヒ　　○○○○○、○ヒ　　○蟠○刹○。××　　○○○○○促。

〔詞〕不刺刺　　○○○○○、○隱　　○蟠○刹○。××　　○○○○○促。

〔雍〕不刺刺　　○○○○○、○隱隱　　○蟠○○○。○吁吁　　○○○○○促。

〔臧〕刷刷刷　　○○○○○、○隱隱　　○蟠○○○。○吁吁　　○○○○○促。

〔元〕道吉丁ヌ(丁)火鎗和斧籠罩着身軀。道足呂ヌ(呂)忽斧迎鎗數番烟焰擧。

〔盛〕×珪玎璫　　×○○○○○○○。×○律ヒ　　×○○○○○○○。

〔詞〕×珪玎璫　　×○○○○○○○。×○律律　　×○○○○○○○。

〔雍〕×○玎璫　×○○○○○○○○。×促律律　×○○○○○○○○。
〔臧〕×○當當　×○○○○○○○○。×扢掙掙　×○○○幾○○燄○。

〔元〕道坑察ヌ(察)着鎗和斧萬道霞光注。道厮郎ヌヌ(郎郎)呀斷凱(鎧)甲落兜鍪。
〔盛〕×扢搽ヒ　×○○○○○○○出。×○瑯ヒ　×○○　○○○○。
〔詞〕×扢搽搽　×○○○○○○○出。×○瑯瑯　×○○　○○○○。
〔雍〕×扢搽搽　×○○○○○○○出。×○瑯瑯　×○○　○○○○。
〔臧〕×可擦擦　×○迎○○○○○出。×○琅琅　×○鎧　○○○○。

【收尾】　盛本・詞本・雍本・臧本作【尾聲】
〔元〕　把×那坐下征駪猛兜住。嗔忿ヌ(忿)氣夯破胸脯。
〔盛〕　將一匹胯○○　騵　緊○○。○○ヒ　怒○○○匍。
〔詞〕　將一匹胯○○　騵　緊○○。○○忿　怒○○○匍。
〔雍〕　將一疋胯○○騀緊○○。○○忿　怒撐○○○。
〔臧〕嗔忿忿將一匹跨○○騀緊纏○。殺的那楚項羽。促律律向北忙逋。＊
＊〔臧〕[打旋風科云]俺英元帥呵。[唱]

〔元〕　生搭損那柄黃烘ヌ(烘)簸箕來大金蘸斧。[赶霸王出][駕封王了]【散場】
〔盛〕俺英布○○○××明晃ヒ　筱○般×○○○。
〔詞〕俺英布○○○××明晃晃　筱○般×○○○。
〔雍〕俺英布○○○××明晃晃　○○般×○○○。
〔臧〕兀的不○○○××明晃晃這柄○○般×○○○。

〔元〕題目　張子房附耳妒隋何
　　正名　漢高皇濯足氣英布
　新刊的本關目漢高皇濯足氣英布全

◆臧本（元曲選）は更に続く
[張良云]俺這壁勝了也、那壁敗了也。探子、賞你三壘酒、一肩羊、十日不打差。[探子叩頭謝科下]
[樊噲云]不知項王敗走那里去、俺每領些軍馬赶上、殺他一陣、也好分他的功、不要獨獨等這黥面之夫占盡了。[隨何云]項王既敗、帝業成矣。臣等請爲大王舉千秋之觴。[漢王云]今日之勝、皆賴軍師妙算、隨使者游説之功、諸將翊贊之力、只等英元帥奏凱回來、孤家當裂土而封、大者王、小者侯、不敢吝也。[正末引卒子跚馬上、唱]
【側磚兒】爲甚麼捐軀死戰在沙場、也則要赤心扶立漢家邦。莫道咱居功處無謙讓、咱本是天生下

碧玉柱紫金梁。

【竹枝兒】他若問英布如何救外黃、咱則説項羽虧輸走夏陽、恨不就窮追直赶到烏江。今日箇鳴金收士馬、奏凱見君王、堤防、只怕他放二四又做出那濯足踞胡床。

[云] 可早到漢營了也、令人。接了馬者。[做下科] [卒報云] 喏、報大王得知、有英元帥到于轅門之外。[漢王云] 隨大夫、你出去引進來。[隨何出迎科] [正末入見、云] 末將引兵到外黃城下、與項王決戰、幸獲微功、只是不曾請的旨、不好窮追、望大王勿罪。[漢王云] 項王此敗、其意氣消折盡矣。況他龍且周蘭已爲韓信所斬、只待諸侯之兵會集、那時追他、亦未爲遲。孤家聞知兵法有云、兵賞不逾日、當時韓王克齊、就封三齊王。今卿建此大功、封爲淮南王、九江諸郡皆屬焉。隨何説卿歸漢、功亦次之、加爲御史大夫。其餘諸將、姑待擒獲項王之後、別行封賞。一壁廂椎翻牛、窖下酒、就軍營前設一慶功筵宴、賜士卒大酺三日者。[正末同隨何謝恩科] [唱]

【水仙子】謝天恩浩蕩出尋常。[帶云] 咱英布呵。[唱] 與韓信三齊共頡頏。便隨何豈有他承望、也則爲薦賢人當上賞、消受的紫綬金章。咱若不是扶劉鋤項、逐着那狐群狗黨、兀良怎顯得咱這黥面當王。

題目　隨大夫銜命使九江　　正名　漢高皇濯足氣英布

漢高皇濯足氣英布雜劇終